

十三鐘
絹懸柳
妹脊山婦女庭訓

第一

三器云々一天邊
鑿劍は勇、八咫
鏡は智、八尺瓊
の曲玉は仁に象
れりといふ傳な
り

寛然云々一怒々
と笏取り直し

序詞 頭直位す敷津八洲の三器、智たり仁たり英勇の、利劔四夷を刑し、和らぎ治む和歌の道、八つの耳をふり立て、小男鹿の聲彌高く、曲を直に措、操久しき君子國、榮枯交々皇の、寶祚傳へて三十九代、天智天皇の宮居なす、奈良の都の冬木立、日の本の聖主たる、君萬乗の御身だに、闇き盲の御惱、天地に日をうしなふごとく、堂上堂下是を痛み、時々の評義も外ならず、玉座の左は蘇我の蝦夷子大臣、政務を預かる威に蔓り、我意憍慢たる其勢ひ、右の座には安部中納言行主、庭上の勤臣には、大判事清澄、守護の武功を立烏帽子、素袍の袖もたをやかに、同じく此方は蝦夷子が家臣、宮越立蕃、其外百官百司の面々、威義を正して伺公ある。蝦夷子寛然と上笏し、「改めていふに及ばねど、帝盲とならせ給ひ、神例古實日々の政務、行はせ給ふ事能はず、老身の此蝦夷

奏問—奏聞

ゆつて—ゆつて
の詛

さだ過一年頃を
過ぎて

子、悉く是をはからふ。柝入鹿の大臣は、病床に引籠り、又進出て力となるべき鎌足の大臣には、假初にも虚病を構、行事を捨て引込む了簡、疾より帝へ奏問遂、今日は鎌足を呼出し、事を糺すに一決。夫故使を立置たり」と、儕が邪智を押し隠し、讒言ぞ是非もなき。中納言進寄、「蝦夷子公の仰もさる事ながら、忠勤直き鎌足大臣、何を以て野心あらん。再三思慮をめぐらされ、龜忽の計ひなき様に」と、仰も待す宮越立蕃、「コハ行主公の詞共覺へず。君の叡慮を安んぜんと、老身の疲も厭はず、忠勤一途の蝦夷子公、龜忽の奏問有べきか。歌蹴鞠に日を暮し、政務を知らぬ馬鹿公家と、一つ口には申されず」と、傍若無人のお主殿貞、大判事居直つて、「ヤア陪臣の立蕃過言千萬。堂上の論談は君子の諍ひ、其方達が知る事ならず。下つて居やれ」ときめ付れば、玄イヤ陪臣でも、陪臣でも、理非を正すに遠慮はない。今一言ゆつて見よ、手は見せぬ」と、詰かくれば、此方も鈔元くつろけて、既に斯うよと互の争ひ、蝦夷子聲かけ、「ヤア、清澄、立蕃めも指扣へよ。不禮至極」と制する折から、取次の青侍罷り出、「武官の旁へ御願ひの筋候とて、先達て相果し太宰小貳の後室、押して伺公仕る」と、呼はる程なく入來る、太宰の後室さだかとして、媚も粧もさだ過て、世を捨草の二つ鬘、襦さばきしとやかに、階近く

両手をつき、「恐れながら申上ます、過行し太宰小貳、五十日の忌明も相濟、何卒娘雛鳥に、
 似合しき聿をもふけ、太宰の家相續の御願ひが申上度、ついに上らぬ雲の上、慮外はお赦
 し下され」と、會釋の顔も紅葉せり。大判事打向ひ、「某取次を申上、御窺申べけれ共、
 小貳殿存生より、此清澄とは遺恨有家。取次して叶はぬ時、私の意趣により依怙の沙汰、
 致したなどと疑はれては詮がない。ソレ立蕃取つがれよ」玄ヲ、是幸、何さだか殿、兼て
 主人蝦夷子公にお願ひ申、貴方の息女雛鳥殿、某が宿の妻に申受度いろくと申せ共、今
 に何の沙汰もなし。只今のお詞で、拙者も安堵致した」と、思ひも寄ぬ聿がねに、とかうの
 返事いひ兼て、差俯伏いてるたりける。行主耳にもかかけ給はず、「ヤアくさだか、立蕃が
 願ひは内意の事。何れの内奏問遂、家名相續の沙汰あらん」さだア、有がたうござります。
 長居は恐れ」と、押付の、聿の評義を免がれて、御前をしづく立歸る。君は御惱の奥深き、
 帳裡を出る采女の局、蝦夷子大臣に打向ひ、「帝様の勅諭有、行主様にも聞し召せ、鎌足
 大臣に野心有の奏問、今日御殿へ招き寄、事明白に糺すべしとの綸言なり。父上を召まし
 て、何事も聞給はれ」と、打しめりの給へば、蝦夷子大臣居丈高、「鎌足大臣遅參は不審。又
 も使を馳候へ」と、呼はる折から「參内」と、案内して入來る鎌足大臣、中納言座を譲り

水魚の交り―君
臣の睦しき事

給へば、押直つて蝦夷子に向ひ、鎌今日某を改めて召るゝ事、何事やらん」との給へば、采女の局進寄、局父上へ申ます。とくより病床にましくて、久しく參内なき事を、諸卿野心有との疑ひ。忠勤厚き大臣、何か曲れる心あらん、速に云開くべしと有難き勅詔」と、聞もあへず蘇我の大臣、「鎌足の大臣とは、主上の左右を助合、水魚の交り厚ければ、詔を正すに遠慮はならぬ。只今貴卿に見する物有。彌藤次參れ」と呼ばれば、「あつ」と答て荒卷彌藤次、一つの篋を携へ出、御前に直し引さがる。蝦夷子件の篋打ひらき、「五日以前、春日の社壇へ、何者共知れず、奉納の此一篋。中には一つの鎌を入、男子誕生平天下と書付たり。其方の娘采女は、斯の如く君に傳、誰及ばぬ寵愛、男子誕生有ば、鎌足殿は自然と外戚、平天下と書添たるは、四海を乗取心の祈願。鎌は鎌足の家の寶、外に類のない重寶。其影の鎌を新に打せ、奉納有しは余人でない。覺ないとはいはれまい。サア返答有鎌足殿」と、思ひも寄ぬ印の鎌、數多の公卿鞆果、口を閉てぞ居たりける。鎌足大臣思慮を定め、「此身に取て曾以て覺なけれど、目下疑はしき影の鎌。叛逆の者有て、我を罪に落さん結構。此惡黨を見出す迄は、申分ても詮なき事。我は暫く禁裏を避け、何れへ成と蟄居せん」鬻、ホ、ウ其身の明り立迄は、何れへ成と蟄居有。ソ

立か弓一立つに
かく
利を云々利は
縁の縁

みをじるし一器
標めじるしの意
に用ひたり
ゆたのたゆた一
ゆら〜と長き
腰と思云々腰
をかけ思をかけ
にかけまくをか

レ〜立蕃、彌藤治、門前へ送り出せ、早ふ〜に采女の局、「何故申分を遊ばさぬ。コ
レのふ申父上」と、歎をいさめる中納言、耳にもかけず鎌足大臣、しづ〜歩出給へば、
蝦夷子を始め數多の諸卿、早退散と立か弓、武勇たゆまぬ清澄も、覆へる雲に是非なく
も、心の駒の扣へ綱、荒卷宮越、素袍の袖、肩臂はつて歸館の警固。利を隠せる鎌足は、
心にはかる七重八重、剛し九重振り捨て、いづくの空やはかりなき、後の榮を松の色、操
變らぬ君が代の、例久しき三重春日野の、社頭に近き小松原、時雨時間の狩戻り、大判
事が嫡子久我之助清舟、美男共美童共、さたに聞へし角前髪、それとは見せぬ蓑笠に、ふ
りかたけたる吹矢筒、詣で休の捨床几、是幸と腰打かけ、勞を休むる其折から、本社
の方より下向の一群、派出を揃へる風俗の、中に際立武家育、年は二八か夫ぞ共、振の
袖のみ、みをじるし、ゆたのたゆたの絹かづき、歎數多引連て、打過ながらふり返り、見
合す顔も清舟と、互に月よ花の香の、こほるよ愛につよくりと、思ひになやむ立姿、氣
轉きかして、歎共、少コレ枯梗殿、今日はマア余程の道。お上にも嘸お草臥。こちらの
床几で一休み、萱ヲ、小菊殿よう氣が付た」と、附々共にいざなはれ、腰と思ひをかけ
まくも、神の教のゑにしかと、心の内の嬉しさに、雛鳥は只清舟が、姿に見惚れ餘念な

御寮人―雜鳥を
さす

下行く水のこぼ
れ口―思ひが外
面に願はるゝ

し。少ノウ申御寮人、最前から見ますれば、アレ彼方の持てござる遠目鑑の様な物、不思議に思し召のである。不躑ながら私が往て、借ましてお目につけふ。ノウ桔梗殿、合點か」と、點頭あふて隣の床几、小腰をかどめ會釋して、「イヤ申あなた様に御無心がござります。此方の御寮人の申されますは、お前様の持てござる、其遠目鑑の様な物、暫しが間お借なされて下さりませ」と、云かけられて、遇コレハく安い事。是は小鳥狩を致す吹矢筒と申物」少ム、そしたらはが吹矢筒でござりますか。申々御寮人様、是をマア御覽じませ、雜鳥でも大鳥でも、アレあなたの吹矢筒を持て、くつしやりと射なさるのじや。マア此筒をちよつと握つて御らうじませ。どの様な所へでも、心よう届きそふな、長アイ物でござります」と、滑稽交りの戀の橋、岩木にあらぬ清舟も、につこり笑顔相惚れに、下行く水のこぼれ口、掬ひ上て桔梗が氣轉、「コレ申御寮人様、早ふ埒の明様に、思ひのたけをおつしやりませ」舞何をマアいやるやら。ついに逢見ぬあのお方へ、どふマア直にいはいれふぞ。わしや恥しい」と袖覆ふ。折から社の境内より、蝦夷子が家來宮越立番、鎧挾箱いかめしく、代參の戻りがけ、此場の體を見るやいな、供に制して挾箱、腰打かけて窺ひ居る。斯とも知らず、奴小菊、「コレ申、前髪のお侍様、私がかた

叫竹一竹の本末にて兩人互に叫くに用ふ

こかすー倒す

ちへくくつた
一乳纏つた

の御寮人様、申たい事が有ど、恥しうござりますけな。幸な此吹矢筒、咄しに聞いた叫竹、どふぞ聞て上まして」と、耳と口とへあてがふて、「かう此中を私が持、取も直さず媒役」雛鳥は筒へ手を、思ひ有たけ一口に、いへばこなたは耳で受、打黙いて返り言、可愛いらし事通じ合、互に嬉しさ恥紅葉。立番主従夢現、娘共は氣を利し、二人を床几へ押やれば、扇を開き寄添て、口と口とを鴛鴦の、ひつたり抱付此方には、ぐはつたりどつさり挾箱、こけ落るやら鍮持は、鍮をこかして立さはぐ。清舟も打驚、床几を退けば宮越立番、起上つて砂打拂ひ、一ヤア久我之助殿、よつ程に味やらるよ。イヤ其處な相手は、過つる比、相果し太宰の娘。コリヤ興がるは。コリヤ能所へ出くはした」と、聞て二人は又恟り、齧ム、扱は太宰殿の息女なるか」雛「お前は大判事様の御息、久我之助様か」齧ホ、過行れし其方の父、太宰の小貳と我父とは、故有て遺恨有家。其息女とは夢にも知らず、只今の體たらく」雛「そんならお前に添事は成ませぬか。ハア、はつ」と計にはや涙。宮越は聞とがめ、「スリヤ兩人は早ちへくくつたよな」齧「ア、いやこれ、必能相いはれな。遺恨有家共知らず、最前の時雨の内、同じ床几に雨舎り」齧ム、成程、今の雨舎り、夫なら夫にして置ふが、一體此雛鳥には某が大執心。夫故宿の妻に申受ん、と兼て主人

へ願ひ置。ハテ今迄の事は、譬如何様な事有ふと儘よさ、此後心に隨へば、其處はぐつと了
簡する」少「是はマアきつい粹様。私は雛鳥の召使小菊と申者でござんす。ほんにマア浮世
じやナア。入鹿様の様な聖人といはるゝ、情深いお方の親御に、アノ意路悪の蝦夷子様、其
御家家の小意路悪、此方の御寮人を嫁にせふとは、ヲ、笑止」と打笑へば、玄蕃脱付、「ヤ
イ〜〜女め、其過言覺ておれ。是から直に御所へ馳せ行、二人の様子を觸廻り、何奴も
此奴も身の上」と、駈出すを姫共、袖にすがつて、「ア、コレ申、今の様にいふたのは、お前
様のお心を引て見る謀。ヲ、正直なお方では有はい」玄「ム、スリヤ身がいふ様に取持か」
娘「取持いでよい物かいな」玄「ヲ、夫なれば了簡する。サアお娘が眞實に應といふか、ソ
レ最前ちらと見て置た、吹矢筒の咩竹で、聞たい〜」娘「扱も目早いお方では有ぞ。お望
の通り、咩竹で御返事を聞しませふ。サア〜耳へおあてなされ」玄「ヲツ」下心得吹矢筒
耳に押當居合腰、「サアどふか〜」娘「コレ申雛鳥様、よいお返事を早ふおつしやれ。ア、
コレ申立蕃様、恥しがつてでござります。ちつとの間お目をふさいで」玄「ヲ、〜」
ヲ、成程々々、夫も合點」と眞赤な、顔に似合ぬ成佛眼。小菊は心得有合ふ吹矢筒へ差込
口押當、ふつと吹ば宮越が耳へくつさり、玄「アイタ、〜、エ、こりやどふしをる」と

成佛眼―目を細
くする

しどろ—亂れる
やごとなき—貴

狼狽へる、其間に雛鳥打連立、館へこそは逃歸る。立蕃は吹矢拔取て、堪忍ならずと追かくるを、久我之助押留、遣ア、コレ高が女の戲事、彼はいふ程却て恥辱」と、なだむる此方の岨道より、數多の侍走り付、「清舟殿是にごごるか、方々とお尋申た。先刻采女の局様、禁庭の御殿を拔出、いづく共なく行方知す。貴殿事は采女様の傳役、早々お知らせ申する」と、聞て驚く久我之助、「何采女様御行衛知すとや。ム、何にもせよ程は有まじ。貴殿方は是より直に、所々の出口を吟味有、我は山手を詮義致さん」玄、ホ、聞捨ならぬ采女の出奔。蝦夷子公へ注進せん」と、立蕃諸共數多の侍、出口の方へ急ぎ行跡に清舟只一人、「ハテ心得ず」と一思案、胸もしどろに入相の、山手をさして歩行。向ふより來る人音に、身を除てやり過せば、さもやごとなき内裏上臈、心も空に歩行、袖を扣へて、「采女様でござりまするか」采ヤア久我之助か」遣ハア、只今組下の注進有て、采女様には御殿を拔出、御行衛知すと申が、いか成御所存有ての事」と、問れて辛き物語り、采其方も聞及ばれん。蘇我の蝦夷子威勢にほこり、わが娘橘姫を後に立んと兼ての望、わらは君に思はれ參らせ、夜の御殿晝の亭、暫しもお傍を離ぬ猜み、父鎌足様をも讒言して、大内を遠ざけ、何方にお渡有共、此身さへ露しらす。わらはが傳き參らす

浮身—躰身
隠れみの—身の
と裳、天か下に
雨を中庭になし
をかく
肉屏風—女小性
にて取廻すを屏
風と見立てたり

程、帝様のお身の仇。誠有入鹿の大臣、父蝦夷子を諫兼、引籠り給ふ由。夫故父の隠家を尋求め、身を隠し姿をかへる身の望、只見遁しに頼ぞ」と、跡は涙にくれ給ふ。遣「ハ、此身は傳の役目なれど、後日の難義少しも厭はず。御身の爲又第一は天子の御爲、成程落し參らせんが、諸士共、方々手配致せば、村口を御供申、たばかつてお通し申さん。先々是をお召有」と、件の蓑笠きせ參らせ、いたはり出る出口の方、又も大勢足音して、以前の武士共走付、宥闇紛れ透し見て、「久我之助殿いまだ是にか。出口々々吟味せしが、お局の行方知す」遣「ホ、拙者は山路吟味の上、コレ是に居る百姓が、怪しき人見付し注進。未だ夫とは極めねど、大方に采女の局。我は是より此土民に、案内させて吟味を遂る。各は此趣急いで禁裏へ奏問有」武士「ホ、畏り候」と、皆々勇み大内へ。こなたは浮身隠れみの、笠に涙の天が下、清き心の清舟も、俱にしぐれて三重行空は、九重の、榮に隣る一構、三條の御所と持はやす、蘇我の蝦夷子が廣館、雪見の亭を設の座、女小性を肉屏風、奢に透間中庭の、蔭を轉すつかね雪、冷たさこらえ、主命の重き役目と宮越立藩、跡に荒卷彌藤次が、臺に乗たる雪人形、各機嫌を窺ひける。女中達口々に、甲「是はく御兩所のいかい骨折、殊に此雪細工、兎の耳がきつい手際」乙「チ、枝折殿の云しやる通

底はかと一何處
ともなく、養老
の瀧の水底にか

づくにうめ一法
體のものを罵る
詞(俚言集覽)

束帶姿の此人形、奇麗な事じやないかいのふ」と、響そやされて兩人は、おとなげなくも
出かし顔。蝦夷子につこと打笑給ひ、「ホヲ立蕃、彌藤次、出來たく。イザ酌取」と、余
念なく、廻る。盃養老の、盡ぬ泉の底はかと、案内もなく廣庭傳ひ、入來る二人の僧
彌藤次見咎、「ヤアく、兩僧、何用有て罷り通る。御前成ぞ」ときめ付れば、眞「イヤ我々
は御領分に住職致す文聖寺、八乗寺。佛法歸依の入鹿様、今日行法の滿願の日なれば、
拜禮に伺公せり。罷通る」と奥庭へ、入んとするを蝦夷子は脱付、「ヤア入らざる入鹿が佛
三昧。うぬらも其組下か。忝くも日の本の神の守護有我館、奥の亭へ通らんなどとは、
其身をしらぬ賣僧共。首をならぶる覺悟せよ」と、氣色變れば、文「ア、申お前様が佛嫌と
は、夢三寶存せぬ事。命はお助け下さりませ」ハ「ア、是も又お嫌ひか存じませねど、拜
まする」と手を合せ、身をふるはして青ざめ顔。眞「ホ、首引抜てくれんすなれど、取に
足ぬづくにうめら。コレ立蕃彌藤次、兩僧が衣を剥ぎ、月代を奴に剃立、門前へほつ拂
へ。夫を肴に又一獻。奴、共用意々々」と詞の中、ざはめき立て女中達、櫛笥の剃刀持出
て兩士へ渡せば、こはくながら文聖寺、「ア、そんなら此衣をはぎ、頭を奴にお剃なさ
ると、還俗でござります。どふぞそれは御堪忍」亥「ホ、還俗がいやならば、兩人が手に

から剃—水をつ
けずに剃る、

掛ふか「ハア、申々々、コレサコレ文聖寺、命がはりじや、どふなとして貰まじや」
彌「チ、よい合點。今玄蕃の云わるゝ通り、いやといふと直に成佛、御前様のお慈悲を
以て、うぬらが好の佛國、天竺へ所がへ」魚「イヤモウ天竺へ行いでも、ほんの是が天竺
浪人、手に覺た能はなし、困つた物じや」と呷く中、玄蕃彌藤次傳手に衣剥取、引すへ
て剃刀手合せ、ごつしく剃りかゝれば、兩僧は首をすくめて、アイタ、、、文「ちつと
待て下さりませ。から剃りとはあんまりむごい。コレ八乗寺、こなたも嘸いたかろく。
申々、どふも堪へられませぬ」ハア、コレく文聖寺、夫は悟道の居らぬからじや。首
がはりの此月代、悟の道を極たら、痛いと思へばいたけれど、ハテいたうないと思へば
やつぱり、アイタ、、、「あいたくを興にして、蝦夷子は酒宴こなたには、奴頭に剃立
れば、撫廻しく、残つた鬢に顔見合せ、文「ホンニあんまりの事で、いたおかしいわい。の
ふ八乗寺」ハチ、サ、われがおれか、おれがわれかで、どふも濟ぬ頭に成た」文「ハテ是
からは申合せ、何なとして渡世する」ハ「貴僧は是より文聖寺の一字を取、文七と名を改
めよ。愚僧は又、八乗寺の八を取、八藏と付てこまそ。ハレかはつた事になつたナア文
七殿」文「ホ、こりや、マア目出度うなつたわい。こなたもそんなら今から八藏殿」二ハム

ムへ、くくく」とやくたい坊。立蕃彌藤次追立て、門外さして出て行。折から表の廣
まぐら、とりつぎ、せいし、いで、「大判事の子息清舟、召に應じて參上」と、呼はる聲に入來る久
開口、取次の青侍罷り出、「大判事の子息清舟、器量骨柄武氣備はる、中に優美の長上下、禮儀正しく座に付ば、蝦夷子大臣
我之助清舟、器量骨柄武氣備はる、中に優美の長上下、禮儀正しく座に付ば、蝦夷子大臣
進寄、「珍敷、久我之助、使を立しに早速の入來。尋度事別義でなし。帝愛憐をかけ給ふ采
女の局は鎌足が娘、此比内裏を拔出、入水せしと聞つるが、其方は采女が付人、實否を
聞たく呼寄たり。噂の通り違はないか」眞仰の通、采女殿には、世をはかなく思ひ取、猿
澤の池へ入水有しが、我傳の役目なれば、野邊の送り營、參らせ、いまだ三日を過ぎず、
と詳に答ふれば、蟹、さこそく。親鎌足が蟄居を悲しみ、淺ましい采女が成行、其方
付人の越度と成、親大判事に勘當を受たと聞。さ有ば主も親もなき身。夫に何ぞや、い
かめしく禮服を著傍て、我目通りへ出たるは、心得難き汝が心底」眞ハ、御不審の段御
尤もなく主君もなく、獨立の私。若輩ながら蝦夷子公へ、奉公の義願ひ上度、君と
敬ふ此禮服」と、心に探りの一思案、まことしやかに相述べば、蟹、ホ、扱は此蝦夷子を頼、
奉公の望とや。若輩者の神妙々々。我も望む所なれど、其方が父大判事に、汝が勘當赦
させて、親子共臣下となさん」眞コハ仰共存せず。親大判事が氣質として、一旦申出せ

さしつたりーオ
イ合點
尾箱―無體

し事、翻らぬ鐵石心。勘當も赦さず、元より二君に仕へぬ所存一蟹ヲ、其口剛き大判事、蝦夷子が幕下に付て見せふ」遣「ホ、お手柄に如何様共。親清澄得心致さば、其上もなき仕合。所詮私一人の奉公が相叶はずば、とや角申て益なき事、先お暇」と禮義をなし、廣庭におり立て、しづく歩む向ふの方、兼て云付置たりけん、玄蕃彌藤次立出で、前後を圍み二王立、「ソレ」と蝦夷子が下知に連、兩人一度に切付るを、身を沈めば双方の、刃は合打、「さしつたり」と、開いて又も横備、車輪の釘付込切先、清舟心得、左右の柄元しつかと握り、「蝦夷公の仰成か、何故に尾籠の手向ひ」蟹「ホ、不審は尤。其方が武藝の試、兩人に云付置たが、天晴々々」遣「コハいかめしき御尋。若輩の私なれば腕だめしの覺もなし。猶此上に手練を極め、重て御覽に入ませふ」と、双方を突放せば、跡へしさつて兩人が、又も切込む刃と刃、庭の飛石エイウント請れば、御殿の天井より、怪しく下る鐵網に、清舟吃度眼を配り、「コリヤ再三のお試、眞劍のお相手がお望ならば兎も角も」兩人「イヤモウ驚き入たお手際。見届ました」と双方の、刀は鞘に飛石も、元へ直せば御殿の網、棟木遙に隠れける。久我之助さあらね體、遣「蝦夷子公、試の切先を、受留た今の飛石、地を放るとと下る鐵網、元のごとく石を置ば、網も隠れて其體なし。ハ

毛を吹て云々
諺を利かす

めどの方一入鹿
の夫人

定に入一生なが
ら土中に入り彌
勒菩薩の出世を
待つ

テ六つかしい御用害」と、響る一言ぎつくりと、術の試毛を吹て、疵をくろめるしたり顔
蝦「太切の此用害、其方は身内同然、見せて置も幸」と、俄になつける詞の艶、道ハ、此
清舟も武士の端、只今如きの御手配り、決して他言は仕らぬ。御氣遣ひ御無用」と、暇
申て久我之助、左右に目配り悠々と、表をさして立歸る。跡に蝦夷子は溜息の、一間の襖
押明て、入鹿大臣の妹橘姫、跡に續てめどの方、舅に心奥の間は、今日の酒宴にか
け合ぬ、鉦の響も身にしみく、めど「御機嫌いかど」と兩手をつき「御酒宴の半ながら、
あなた様へ御願ひ。夫人鹿大臣には、秋の比より一向に、佛の道に入給ひ、奥の亭へ引籠
り、一つの棺を地中に納め、丁ど今日が百日目、入相の鐘を限りに、定に入給ふと聞。何
に譬ん此身の悲しさ。何と便が有物ぞ。少は思ひやり給ひ、お諫なされて下され」と、涙
先立既言。同じ歎を橘姫、「何卒再び兄上様、遁世の思し立とどまり給ふお願ひ」と、一
つ思ひを二人して、いふを打消父大臣、「ヤア聞度もない入鹿めが沙汰。今此蝦夷子が威勢
に次、何不足なき榮花を捨、佛法といふ天然外道の術に歸依し、奥庭へ引籠り、晝夜わ
かたす稱名讀誦。此世に有て益なき怙、土へ成と定へ成共、入次第にして置めせ。ま
た最前から鉦が鳴、エ、忌はしい不孝者。嫁も娘も重ていふまい」二人「ハイ」蝦「いやま

風の櫂—和ぐに
かく

泣て—なしにか
く

いふ榮—らふと
夕映

だ不吉な泣聲。此酒宴を妨るか」めど「イエ〜申、何のマア御遊興を妨けませふ。モウ何にも申ませぬ、涙もこぼしは致しませぬ。御赦されて下され」と、袖に解行しほり雪思ひは胸に氷るらん。橘姫引いて、「申父様、モウ兄上入鹿様の事、申者はござりませぬ。御機嫌を直されて、別殿で御酒宴を」壺ホ、娘能いうた。是よりは居間を替へ、再宴を催さん。玄蕃彌藤次も奥へ來よ」と、怒の風も風の櫂、姫共が取々に、一間へ伴ひ入にけり。橘姫心せき、「父上のお氣質、何程お願ひ遊ばす共、お聞入は有まい。是よりは此橘、大内へ急参り、何卒兄上入鹿様、入定を止り給ひ、再び昇殿有様に、幾橋のお局へお願ひ申心ぞ」と、力付ればめどの方、「難面は入鹿様。今日を限りの入定と、生別れのわたしが身、同じ館に有ながら、暇乞にお顔を、願ふ事だに中々に、築山の門を閉、物いひかはす事さへも、泣て暮しております」と、むせぶ涙を友千鳥、同じ翅に露時雨、しのぐ方なき思ひなり。姫は涙を打はらひ、「めど様氣遣ひ遊ばすな。暮を限りの事なれば、一刻も早ふ自は大内へ」めど「夫は一入御苦勞ながら」壺「是はマア改まつた、わらは逆も同じ事。ソレ、姫共、大内へ上る用意せよ」畏つて附々が、「輿乗物」といふ榮の、日比中よき嫁小姑、互に力付合ふて、禁裏をさして急ぎける。跡見送つてめ

五輪一地水火風
空の五重の墓

龍田一立に
か

婆
けさ一今朝と製

ごくに云々一役
に立たぬ

どの方、便すくなき身の上を、諦兼し胸の内。警願ひが叶ふ共、心變せぬ夫の氣質、それと知りつゝ頼みしも、妹御の親切を、破らぬ誠とやかくと、思ひ續けて庭におり、木草の枯葉詠ても、猶いや増の無常心、夫の命も今日限り、涙は胸にふりつもる、雪かき集めかき寄せて、氷る手先も後世の爲、束ね丸めて五輪の形、「此世の名は入鹿大臣、頓生菩提」と手を合せ、心の回向せぐりくる、聲も憚るしめ泣に、哀はかなき風情なり。夫に引かへ奥の間は、地下を寫しの三味線に、なまめく歌の聲湧へて、歌花はちつても春は咲く、消て返らぬ其雪にさへ、劣る憂身は消もせで、あんまりといはふか、心ないといはふか、現在子といひ、嫁といひ、けふを限りの命ぞと、悲しむ事を聞捨に、捨た浮世に斯ふして居れば、仇名龍田の流の錦、めど「エ、心ない此中で、雪見の酒宴所かい。アノ鉦の打納めが、入鹿様の御臨終。夫を先立何樂しむ。我も一所に此雪と、俱に未來の道連」と、上著を脱ば墨染の、けさよりつもる廣庭の、雪に座をしめ合掌し、此儘爰に埋もれて、死んと誓ふ貞心は、天に通じて降しきる、膝も袂も白妙に、色香盛の黒髪も、八十の姥と疑はる。恩愛血筋に屈詫せぬ、蝦夷子大臣一間を出、「嫁めどの方、まだそこに泣てるるか。ハテ扱々ごくにも立ぬ、馬鹿者の入鹿が事を苦に病、物好きな雪なぶり、も

妹香山婦女庭訓

ふ打やつて、爰へ来て火に當りやれ」めどアノ胸欲なおつしやり事。夫は定に入給ふに、
 そもやまあ妻の身で、褥の上に居られませふか。雪に凍て死るのが、せめてもの夫婦の
 誠」蟹ハテ貞節な心底。其實心を聞いてお身に伺いたい事が有。悴入鹿が入定は、佛法信仰
 計で有まい、様子無うては叶はぬ筈。親子に増る夫婦の中、夫の心知て居よふ。イヤサ
 何ぞ密に聞た事があらふがな。サ其子細が聞たい。我強うはいふ物の、實は不便な子の
 命、様子によつて入定を止る、思案有まい共いはれぬ。どふじやく」と脇道から、猫
 撫聲も氣味悪き。めど「イ、エ親御様さへ御存知ない事、何のわたしが知つて居ませふ。去
 ながら、脇目から存じますは、夫入鹿様のお覺悟は、お前様のお心が知ぬ故かと存じま
 す」蟹「ハ、くくく」蝦夷子が心は今降る白雪、一目に見へて有潔白。サア其雪に埋れて
 は、上から見へぬ塵芥、心の底がどふも解ぬ、入鹿が性根聞たいく」めど「イヤ申、常
 に夫が申さるよは、内大臣鎌足と父蝦夷子は、國に二つの柱同然、一つかけても我君のお
 爲にならず、と物語、其大事の鎌足様を追退けなされたには、深い様子の有そふな事」
 蝦「ハテ知れた事、此蝦夷子は忠臣、佞人の鎌足をほつ下したは天下の爲、我君のお爲じや
 わい」めど「イエくくく、鎌足様に罪ない事は、世上の人が能知ております。威勢を

妬みそねんでのさかしら事、と世の人の譏は耳に入鹿様、夫が積つてあのお覺悟。一人の榮花を極めん辻、譏も返り見給はぬ、蝦夷子様のお心さへ改めて下されなば、入定も止り給はん。夫の生死は爺御様のお心次第、嫁子不便と思し召、お聞入下さりませ。夫婦が命は厭ねど、お心が直らねば、お前も遁れぬ危い命。君の御恩を受ながら、十善の位を奪ふ、御謀反の思し立てござりませふがな。天道様の御罰にて、お身に報ふが悲しさに、わらはが御異見。悪心を止つてたべ蝦夷子様」と、舅を思ひ夫思ひ、合す兩手にはらはらと、涙深山の瀧なせり。始終とつくと蝦夷子大臣、「モウよい、すりや我大望、残らず入鹿に聞たよな。そふ有ふと思ふた、氣遣ひすな。そち達が望の通にしてくれふが、まだ尋る事が有。めどの方駒下駄直せ」と、刀提庭の面、若や得心有磯海、底は白洲に危ぶむ日遣ひ、鬻嫁近ふよりや」めど「ハイ」と立寄目先へ氷の刃。ハツと飛退、いと舅御様、そんならどふでも、思ひ止るお心はござりませぬな」鬻馬鹿盡すな女め。天下を取ば肉身の入鹿、譲りくれんと思ひの外、道立する性には、もふ構はぬ。思ひ立た大望、一度萬乗の位に昇る此蝦夷子。エ、腑甲斐なき性根と知らず、入鹿に渡した連判狀、儂が有所知て居よふ」めど「イエ」御謀反の譯は聞たれど、連判とやらは」鬻イヤ吐すまい。

身體—進退か
不敵—大胆

はく—内々

一大事を聞いた女、殊に安倍の行主が娘、所詮生て置れぬ奴。いふても殺すいはひでも殺す。其一卷爰へ出せば、苦痛せずに一思ひ。あらがふとなぶり殺し。サアく何と」と付廻す。遁れがたなに肩先すつぱり、付込蝦夷子が突き切先、手負は大地にこけながら、蹴上る白砂雪烟、手に渡さじと懐中の、一卷火鉢に燃立つ炎、嵐に連て烈々と、折しも聞へる鐘太鼓、響「ヤアいぶかしき攻鼓。連判状を焼捨しは、我大望を蹙たる。不孝の入鹿夫婦の奴原、大事を敵に洩せしな。憎くい女め思ひ知」と、足下に踏付肝前を、剥りくるく流るゝ血汐、雪を染なす唐紅、眼血はしる表の方、「勅使成」と呼はる聲。響「ム、貝鐘の音に引かへ、勅使の案内は我胸中、窺ひ探る謀。身躰今日の一擧に極まる。装束せん」と不敵の蝦夷子、帳臺深く入にけり。程も有せず、細殿傳ひ、入來る勅使は安部中納言行主、副使の武官大判事清澄、威義を正して座に付け、出向ふ主も衣服改め、上座に招じ頭をさけ、響「お勅使として行主殿、雪中の路次、別して御苦勞に存する」と、挨拶終れば膝を寄、行「今日の勅使、尋常の沙汰にあらず、貴卿は、父馬子より代々の功、忠勤あつく、君の寵にほこりたるや、ほと逆心の徒を語らひ、帝位をかすめん、企有」と、叡聞に達せし故、諸國の勤番武官の面々、此館を圍所、此行主は

一家の佳、今老臣の蝦夷子大臣、龜忽の計ひなすべからず、と進出て使を乞受、取あへず馳向ふ。包ます言上申されよ」と、聞て蝦夷子は居丈高、「ハ、く、く、く、何事かと存たれば、此老人に逆心有とや。最前より遠く聞ゆる鐘太鼓、スハ禁庭に大事有と、思ふ折から我家へ勅使。佞人讒者の詞を用ひ、叡慮暗き帝の疑ひ、勅答致すも馬鹿々々しい」と、詞尖に云放せば、大判事進寄、「ヤア血迷ひ給ふか蝦夷子公。其身の白狀進給ふ、行主公は一家の佳。叡聞に達する大事、再三吟味有ての事、いか程にあらがはれても、拔さしならぬ證據有」と、懷中より取出し、投やる一卷おつ取て、見れば覺の連判狀、序文の手跡誓書の名印、さしもの蝦夷子も證據に、「ハッ」と計驚く面色。行、ナント見られしか蝦夷子殿。我聲の入鹿大臣、此一卷を帝へ捧げ、諫ても承引なき父は逆心、子として是を顯はす事、不孝の罪莫大なれ共、君恩にかへる道なければ、叡聞に達するなり、我は祖父馬子が意をつぎ、佛法に歸依しぬれば、遁世の外なしと、引籠りめさるれ共、我娘めどの方、謀に命を捨、最前焼捨し贓物の連判狀は、誠に逆心有かなきか、知らせの狼煙、貴殿の口より謀反の次第、最前既に白狀の上、最早陳する詞はあらじ。ナントナント」ときめ付られ、一句一答詞なく、只默然たる計なり。大判事さし心得、三方に

腹切刀、蝦夷子が前に指置ば、行主立寄、傍なる雪人形手に取上、「コレ見られよ。愚成

譬なれど、此束帯の雪人形、其形をなすといへ共、火に當れば、忽水、其人にあらざる

逆心、消果るは天の御罰。せめて最期は此雪の如く、潔く生害有」と、諫の詞を耳にも

入す、無念に堅まる雪人形、傍なる火鉢の炎の上、つかみ碎は水烟、肌押くつろけ腹切

刀、腹に突立怒の眼中、鬚エ、無念口惜や。仕込に仕込し我大望、現在の忤入鹿が手よ

り洩たるは、我運命の盡る所。去ながら、此蝦夷子世を去ば、見よく、忽天地は常闇。不

具者の帝を始め、月卿雲客思ひ知」と、きりきりと引廻す、太刀取後に大判事、はつし

と落す首諸共、矢一つ來つて行主の、胸板射抜あへなき最期。大「こはそもいかに」と恟

り仰天、十方にくれて立まどへば、「ヤア清澄、必驚く事なかれ」と、聲かけて一間の襖

二人の武士に引拂はせ、築山の岩間陰、しづく出る入鹿大臣、髪はおどろに麻衣、さ

もすさまじき有髪の僧形、大判事ぎよつとして、「ヤア入定有し入鹿公、不思議の對面い

ぶかし」と立寄ば、「ホ、實もくさも有らん、不審の一條語つて聞せん。父蝦夷子年を

重ね、反逆の企有ど、其器小さくして、中々大望成がたし。爰を以て此入鹿、表には

仁をかざり、父の悪事をうとめる容、佛法歸依と引籠り、帝を始め數多の公卿、父蝦夷

違背申べし申
べきの詞か
三徳一智仁勇

九一自ら
烈一列
供奉の云々古
今集の「みさぶ

子に心を付、油斷の間を行法の、築山より禁庭の寶藏へ隠れ道、土を掘石を穿、妙計違
はず忍び入、疾より評定有りしに違はず、神璽御鏡失給へど、村雲の寶劔は、安々と手
に入たり、父が命妻が命、芥の如く見捨しは、此時を待謀。あら心地よや潔し」と、御
殿に響うなり聲、扱はと驚く大判事、立蕃彌藤次、弓と矢番ひ取かこめば、大臣重ねて、
「馬鹿者の鬪行主、血祭りに手にかけた。其方は我所存有ば、味方に付けば其通り。否とい
はど行主同然。サア勝手次第に返事せよ」と、大惡不道の入鹿が行跡。爰ぞ大事の大判
事、心を定め低頭平身、「時を得給ふ大臣に、いかでか違背申すべし。我君と仰ぎ奉る」
と、申上ればにつこと笑ひ、スホ、潔しく。三徳備はる此入鹿、天地の間に挟まる
物、誰か敵對ふ謂なし。今日より我こそは萬乗の主たり。ア、ラいまはしの墨衣、いで
や衣服を改めん」と、呼はる聲に數多の官女、てん手に著せる綾錦、立直つて大音上、
「清澄は皇居の案内、立蕃彌藤次殿、せよ。是より禁裏へ馳せ向ひ、帝を始め月卿雲客、殘
る寶の有所を責問、擱ひしいで心の儘。中門のほとりへ丸が車をすよめ、官人共來れや
つ」と、聲に隨ひ數多の武官、烈を正して先備へ、立蕃足駄を奉れば、ひらりとおり立
勇の姿、心も雲井に高足駄、門出の音樂璉然と、又も降來る雪の空、心得供奉のみさぶ

妹脊山婦女庭訓

らひ御笠と申せ
宮城野の木の下
露は雨に勝れ
り」の歌をとる

らひ、柄長の御傘差かくれば、六つの花瓣ひらく雪、威風邊を拂ふ雪、深き思慮有大
判事、前後のそなへ嚴かに、御車はつと時めきて、内裏をさして出てゆく。

第 二

山又山も都路は、心に連て奥深き、名も猿澤の池にさへ、波立世こそ憂かりける。此方
の道よりたどり來る、山働きの狩人共、打連立て立留り、「コレ九右衛門、こちらが仲間
の芝六が、此間から夜狩して、能代物付出した。夫でおいらを助けの雇ひ、葛籠山か
ら、山城境へ入込で居るとの事。今夜はぐつと、働いてやらにやなるまい」丸ヲ、サもふ
明ても暮てもおいらが相人は、猪武者五六疋射とめてやつて、ぐつと褒美を貰はふ。サ
アく行ふ」と世渡りに、追るゝ獵師山も見ず、足を早めて急ぎ行。世の憂さは、尊き
卑きも亡魂の、雲隠れせし思ひ人、采女の局の跡慕ひ、勿體なくも萬乗の、帝の歎淺か
らず、御所を忍びの夜の鶴、夫とは更に人知ず、舍人にも武官にも、只官女のみ道案
内、池の邊りへ御車の、きしるさへ物淋し。殊に盲目の君なれば、哀も勝る御姿、宣ふ
聲も打しほれ、童此邊りが猿澤の池なるかと、仰に官女進寄、「此間久我之助清舟、奏

我衣手は云々
秋の田の假はの
庵の苔をあらみ
の歌

わきもこー我妹
子にて親しき女
にいふ

節會一禁中の儀
式

問申せし通り、采女様入水の跡、猿澤の池にて候」と、申上れば今更に、御落涙をせき
あへで、「思ひ出せば去年の秋、民の營み憐て、わが衣手は露に濡つと、と丸が詠ぜし
傍に、筆を取し其采女、早此世には無き人とや。誠に我衣手は、涙に濡るはしならん。せ
めて今宵の手向ぞ」と、「わきもこが寝きたれ髪を猿澤の池の玉藻と見るぞ悲しき」と詠
じ捨、御涙こそ限りなし。かゝる折しも此方より、尾羽打からせし浪人姿、御車近く手
をつかへ、「女中方へお頼申、帝様の御車と遙に見受申た故、押して御願申事有。憚な
がら奏問の御取次頼入」と、いふ聲夫と聞き召、帝ナニ珍らしや淡海なるか」と、仰に
猶も頭をさけ、一私過つる節會の時、神例の式を過、とくよりも勅勘蒙り、先非を悔て
内裏を遠ざけ、市中に鬻り有所、曾我の蝦夷子我意を振ひ、父鎌足も蟄居致させ、猶玉體
も安からず、と聞より前後願す、何卒玉體守護の爲、勅勘の御赦免を願ひ上奉る」と、
土に平伏詫にける。君叙感斜ならず、一朕が不徳のなす所か、左右に奸佞の人絶す、蝦夷子
帝位の望有て、叛逆の企有事、嫡子入鹿大臣が忠臣に事顯はれ、安倍の行主を使に立
今日事を糺すに及ぶ。いまだ歸り來らねど、蝦夷子が自殺は目下、鎌足内裏をさけし事
も、悔に甲斐なき有様ぞ。今より元の淡海、再び忠勤勵むべし」と、さも有難き免許の

勅説。淡海初め付々も、皆悦びを奏する所へ、禁庭の勤番使、御車の御跡慕ひ、息つぎあへず馳參じ、「主上是に渡御なる事、漸相知れ御注進。今日蘇我の蝦夷子館へ、行主公勅使として大判事を召連れ、渠儂叛逆吟味の所、速に白狀有て、蝦夷子は其座に切腹有、清澄是を介錯す。然る所行法に取籠つたる入鹿大臣、寶藏へ忍び入、村雲の御劔を奪取り、誠は親蝦夷子に越、王位を望む大悪人。行主も忽手にかけて、禁庭へ馳込たり。是に支へる公卿の面々、或は蹴殺し切倒し、上を下へと逃さまよひ、さしもに廣き禁裏の内、人種も盡ん計。猶も追々注進」と、呼はり捨て立歸る。皆々はつと驚きに、わきて帝の御歎、「いか成天の咎めぞや、思ひ計らぬ入鹿の悪心。我四海の主として、臥所さへなき身となるは、淺間しき境界」と、歎かせ給ふを淡海は、「御心よわき御仰」と勇る中に思慮を廻らし、竊に官女の耳に口、申合せて車に向ひ、「思ひがけなき只今の注進。是より馳付遠見を致し、安否を言上申さん」と、出行振の偽りも、盲目の君の御心地を、休る術こなた成、木影に暫しイむ中、取々いさめ奉る。暫く有て淡海は、急ぎ歸りし足音して、御車近く息をつぎ、「只今遠見致せし所、諸國の軍勢蟻のごとく禁庭へ馳參り、さしもに猛き入鹿大臣、直に退け候へば、忽内裏は穩なり。早入御ならせ候へ」と、誠しやかに相述

長柄一轡

いつきせき一息
喘

青願一列卒にて
狩の時の人足

シタが一併し

わいら一汝等

れば、主上は安堵の御思ひ、御悦びは限りなし。淡海は官女を制し、「急いで還御」と先に立、長柄を取て舍人役、押て行衛はいづことも、空定めなき空勇み、露踏分て三重剌り行。山手の道より親子連、爰に名高き狩人芝六、弓矢手狭いつきせき、人絶の木影に立留り、聲を嘯め、「コリヤ三作、此間から夜の狩、是は渡世の表向。雇ひの青願共、山手谷々、方々とかけ廻す、此物音の騒に紛れ、兼てそちに云付た、彼爪黒といふ女鹿は、千疋が中の一疋、夫取たいばかりで、此様に骨を折、其念力が通つたやら、アノ葛籠山の向ふの谷合、見付得た其爪黒。アノ猪狩の螺釘で、ほつ立たら驚いて、向ふの山を越は必定、そちは是から谷へ廻り、青願に螺釘打鳴させ、件の鹿を追出せく」三ヲ、心得ました。シタが是父様、追出すは安い事じやが、鹿を射は所の法度、お前の身に難義が出来ては、母様やわしが身は、どふしませふ」と稚氣に、後を案じる賢しさは、孝行見へて不便なり。芝「ハテ扱氣の弱い事をいふ。それ知れてたまる物か。もししられたらば百年め、命がけな事するのも、此身の榮耀を望むではない、所詮此狩人商賣、人間のする業じやない。せめてわいらには狩人がさせともなく、侍にせふ計じや。爺が身に氣つかひはない程に、サアく早ふ谷蔭へ。おれは別つて麓の方。合點かぬかるな」三「心得た」と、牒し合せ

て親と子が、道は二筋引別れ、山路をさしてぞ三重急ぎ行。谷山峯に陣かす、数の松明螺鈺の響に連る青願の聲、松の嵐も囂き。「スハよき時分」と芝六は、弓矢つがふて麓の方、木影に隠れ待所へ、猪を狩出す山路の騒ぎ、俱に驚き駈來る鹿、件の爪黒、芝得たりやつ」と、切て放す矢あやまたず、鹿の咽吭貫きて、其儘其處へ倒れ伏。三作はかけ付て、「爺様射とめさつしやつたか」父、シイ聲が高い。チ、首尾能ふ仕留た「三、エ、爺様、どふやら剛うなりました」と、身を震はして涙聲、父ハテどどくと氣遣すな。人の見ぬ中歸れば濟」と、傍見廻し心を配り、鹿引かたけ親子連、宿りをさしてぞ三重立歸る。三笠が本の雨舎り、烈しき風吹越して、君が御遊の御車は、此薬家にとどまりし、獵師芝六が詫住居、妻のお雉も建やかに、仕へ參らす大君の、供御のしかけの米粒を、撰むも女中の手談に、紺の蔽膝、緋の袴、打交りても女子同士、つい馴安きならひなり。「ホニニいか様、上々様といふものは、此様に一粒々々米を撰、是はちつと色が黒い、是は角が欠たの、と皆撰出して、上ます米は二粒か三粒。神様より大切な十善の主様、斯なふてはならぬ筈。是を思へば勿體ない、王様に上る供御を踏確、踏ば足が腫ふ」といへば、女中が、「何のいな、上様でも肝心の時は、やつぱり白がお好でな、勿體ないと、此

供御—帝の御膳

十善—前世にて
十惡を犯さぬ者
此世で帝王とな
る

緩聲一横者

しよげつばさしよげ鳥にて身窄らしきさま初更一五ツ時に午後八時

仕丁一禁中の小使
お后様一后を自分
に王を夫によせたり

遡もの一祭禮の時
の山車

流一質流れ
かます袖一蒲賀
に似た大袖
兜羅綿一兜沙と
いふ木に生ずる
綿

方から遠慮すれば、けつかして、下馬緩怠、お呵りなさる」と、笑ひ綻が障子の中、しほたれ公家のしよげつばさ、しよんほりと立出、空ノウク上藤達、夜も早初更に及びしに、夕御前の供御、何として遅なはる。膳番は何國に居る、怠りなり」と呵らるよ。雉「ホ、、、お公家様方とした事が、やつぱり禁裏の格式で。何のマア獵師の内に、そんな仰山な膳番とやらが有物か。あなた方には御存ない、貧乏世帯といふ物は、何も角もたつた一人。むつくり起ると釜の前、庭の掃除は仕丁の役、お清所の飯焚役、釜の出し入内侍役、とんと仕廻しまふて寐る所がお后様。百人前する事なら、手の廻らぬは御推量遊ばせ。此又此方の王様は、遅い事じや」と夕やみに、山を仕廻ふて親子連、息喘き背に大風呂敷、寒風に汗たらしく下りの我家の門、芝、噴今戻つた」と内に入り、「コレハコレハ大切なお方々、なぜ端近ふ出しますぞ。お前方もお前方、在所の遡もの見るやうな、其大層なお姿で、によるく出て御座つては、何ほふ山家の一つ家でも、誰が見まい物じやない。お局方も年中、巫子殿の様に、其長い物を、此狭い内で引ずつたら、裾踏で轉さつしやろ。夫でコレ、奈良の町でよい流れ買ってきた、サア、是をお召替へ」と、風呂敷解て取出し、著せる襦袍の行尺も、哀、昨日の長袖を、在所小紋のかます袖、似せ兜

おあちや云々
官女の名の頭に
お字を附く

小みづー小言か
釣付ーひつばる
事
ふづくられー踏
みつけれ
はしたなきー醜
き

羅錦ろめんの平田ひらた帯おび、根ねから似合にあぬ御装束ごせうそく、矢脊やせのけらを見る様さまな、名なもかへて右大辨助うだいべんすけ様さま、お前はだいな大納言ごんひやうご兵衛べゑ様さま、こちら方が髪かみも町風まちふうに、島田しまだとやらに結直ゆひたはし、「おあちや、おいちやに、お梅うめが香か、在所ざいしょの噂うわさの風俗ふうぞくは、憚はげかりながら私わたしが傳授でんじゆ。ア、こりや噂うわさ、上様うへさまの御膳ごぜんはまだか。何れいづも様さまも、嗚な御空腹ごくうにござりませふ」公卿こうけい「イヤ、心遣こころづかひ無用むよう々々、帝みかどさへ御安體あんたいなれば、臣等しんらが事は苦くるしからず」と、殿上人でんじやうじんも世よに連つて、食客かきりゆうの身の氣きの毒顔どくがほ。芝しば「イヤ、何なんほ尋常じんじやうにおつしやても、内裏だいり様さまも喰くはにや立たぬ。思おもひなしか昨日きのふから、めつきりとお顔かほが細こつた。嗚なマアちやつと、握にぎり飯めしなとして上あい」と、亭主ていしゆは如才じよさい内證ないしやうの、しをくろめて入所いりしょへ、腰こしに帳面ちやうめんぶらく、爰こゝへ郡山こほりやまの搦米屋つぎこめや、「内方うちかたにごんすか」雉けし、チ、新しん右衛門えもん様さま、能よふお出いでたれど、折悪せつわるふ今日は「米屋こめや、ラットお内義ないぎ、又留守またるすといふのか。晦く日に來きると、いつでも朝あさから内に居いぬ故ゆゑ、今日けふは留守るすを云いさぬ様に氣きをかへて、朔日つたちに仕しかけた。拂はらはぬ癖くせに、節季せつきに書かき出し何故なぜおこさぬ、と小みづがいやさに、コレ持もつて來きた此書付こゝ。去年こゝねんの尻しり残のこりが六十六匁もめん三分五厘ぶんごりん、何時いつ迄まで釣付つりつけるのじや。ふづくられては居いぬ男おとこじや。サア、今いま拂はらや、今受取いまうけとふ」と、傍響あたりのびす聲こゑ高く、大納言だいなごんごし押おしとどめ、「ヤヨ下々したしたの者もの、いとはしたなき争あひかな。しづまれよや」と、有あれば、米屋こめや貴様きさま何なんじや、

手の筋見る人―
易者

薄い―貧しい
しやり逆―さり
とてにかく

ハア手の筋見る人か。コレ茶一つ汲で下あれ」雫「ア、滅相な。あなた方は大事のお客」米屋
「何じや、客じや、米代も拂はずにあんなけない人取込で、まだ米屋を街のじやの。コレ喰
ひ潰し達、おれが喚くが無理か、此書出し、ソレ見やしやれ」公卿「ム、此切紙は色紙の形。
扱は歌か」と、つくづく眺め、「ハテ珍らしき五つ文字、書出し、一つ米代、六十六つ、去
年の霜月、残る銀。是は戀歌共思はれず」米屋「イヤ戀も戀、借錢乞じや」公卿「何にもせ
よ下々には、優しくも三十一字をつらねしな」米屋「エ、三十や四十の端た錢じやないわ
いの。貴様もかより人なら、よふ聞かしやれ。爰の芝六は盗人じや。かふいふが無念な
ら、サア金拂へ。かふは云物の、コレ噴衆、こなさんの心次第で、ア、結構な了簡が有
にナ。ア薄い芝六に、百目近ふ仕送つたは、しやりから付入て、貴様の舍利塔、疾から
念かけて居るに、しやり逆は胴欲な、留守が定なら、コレどふぞ」と、ひつたりと抱付
ば、雫「ア、是何さしやんす。主が内に居やしやんすぞへ」米屋「ヤア、内に居るなら銀
受取ふわい」雫「イ、エ留守じやわいな」米屋「留守ならちよつと」と、又取付、首筋掴ん
で板間にどつさり、悔りしながら負ぬ顔、米屋「ヤア芝六、夫程内に居ながら、よふ留主
つかふな、サア米代受取かい」芝「イヤ米代は渡して有」米屋「ソリヤ何時渡した」芝「チ、

あかり障子—今の障子のこと

密夫まをこの代しろ、三百目めの内うちで六十六むそく欠ひい引ひて、跡あとが二百三十四もんめい欠ひい、こつちへ今請取いままをこふ」米屋まをこヤ、ア夫それは「芝あしサア今渡いまわたせ、サアくく」と詰つめかけられ、ぎつちり詰つめつた入口いりぐちぴつしやり門かどからしめて 米屋まをこ留主るすじや。密夫まをこ代しろも米代こめしろも、逢あひさへせねば取とりやりなし。留主るすは五分ごぶ五分ごぶ、算用さんよう濟すんだ」と、お留主るすに成なつた腰こしの骨ほね、ちがく引ひすり逆歸さかへりる。妾めかけは地下ちかに落おちながに 心の官位くわんゐ右近衛みぎみの中將ちゆうじやう淡海たんかい公こう、するくくと立出たちいで、巡めぐ兼秋卿かねあきさやう、政常まさつね卿さやう、君きみにも益えいり叡慮ゑいりょめでたく御渡ごわたり。是こゝといふも芝あし六夫婦むつふが深切しんせつ。虎この口くちの御難ごなんを遁にれ、此家このやに匿かく奉たてまつれ共ども、計はからざる入鹿いるかが亂らん、帝みかどの御耳ごみみに達たつしては、彌いよく御惱ごなうも重おもらん、と何事なにごとも包隠つみかくく、只ただ太平たいへいの容すがたにもてなし、御目ごめ盲しじさせ給たまふを幸さいはひ、此荒屋あはらやをやはり禁裏きんりの御殿ごてんの中うちと、偽いつはりすかし参まゐらする我々われらが氣苦勞きくろう。此上こゝながら御悟ごごりなき様に」と、詞半ことひなの破やれ聲こゑ、「出御しゆぎよなり」と警蹕けいじつの、聲諸こゑ共に押明おしめく、あかり障子しやうしに御格ごかく子しに、御憚ごんいたはしや天皇てんわうは、此賤しづが家やとは夢ゆめにだに、白平絹しろひらぎぬに緋ひの袴はかま、褥しよねに玉座ぎよくうなりければ、各々おの／＼「シイ」と公卿達くぎやうたち、威儀ゐぎを正ただして拜はい調有えう。配膳はいぜんの典侍すけ、阿茶あちやの局つぼね、四方しほうの御盤ごばん、平戸燒ひらたぎやきの茶碗ちやわん、土器かはらけ其儘そのまに、下さる御膳ごぜんを、淡たん海押かいおしとめ、「朝餉あさぐいひ、晝ひるの御膳ごもの、少計すこし召上めしあがられ、今夕こんせきの供御ぐごはお手ても付つかず、此儘さき下さよと勅ちよく説じやうか。扱れうりはお料理れうりが御機嫌ごきげんに叶あはぬか。エ、不調法ふてうはふな、御膳番ごぜんはんの大隅おほすみ大炊頭おほひののかみ、急度きつど申付

常寧殿―大内の御殿にて中宮女御の御住居

竹林の七賢―阮籍、向秀、王戎、山濤、阮咸、劉伶、嵇康の七人

繪言云々―繪言汗の如し一度出ては再び返らずの語による

ん」と、立んとするを、帝「ヤヨ淡海、さな心いたためそよ。膳番の者の罪ならず、兩眼くらき病ふの上、采女が別れの歎に沈み、思へば詮なき心の迷ひ、不徳の君と蔑しまん恥しさよ。爰は常寧殿よな、夫に詰しは誰々ぞ」遂ハア大納言兼秋、右大辨政常、其外參議、中將、少將、百官、百司、残らず參内仕る。エ、御目だに明らかならば、遠方の御幸はならず共、此内裏の中にて、見所は様々。其障子の繪衣には、桐に鳳凰、見事な彩色、上段の繪は、竹林の七賢、又清涼殿の廊下より、奥の間の四季、杉戸には蘆に鷹、雪に梅、種々色々の名畫名筆、毎日見ても飽ぬ御殿。夫よ初春にもならざるに、梅壺の梅今を盛り、君の御目も開かるべき瑞相にて候」と、誠しやかに奏問有ば、帝「實さこそ。十善の位には即ながら、此九重の内だにも、見る事叶はぬ常闇の、御裳川の流れを穢す、我誤りのなす所。誠にこの月の内侍所の御神樂、兼てしゆらいも有べし。病平癒の祈なれば、樂人共を召出し、壽の管絃を始めよ。早とくく」と、仰に恟り、遂ハツハツと計俄に管絃の才覺も、出て返らぬ繪言の、冷汗ながら、遂ハアく是はよき思し召。樂は何かよからうぞ、還城樂か、武德樂か、樂人只今追付是へ。エ、何として遅參致す」と、立端のしほに芝六が、手を引て門に出、遂ハ扱迷惑な勅説。俄に管絃のお

てこにちへぬー
力に叶はぬ

坊主―子供

かぐれ様―目盲
様

左近云々―紫宸
殿の前なる左近
の櫻右近の橋

望、譬出來るにしてから、笛太鼓で騷立ば、忽人に御有家を知らるゝ難義。何と智恵は有まいか」芝知恵というて、私らがてこにおへぬ樂とやら、舞とやら、一體お前がこんな内で、太平樂おつしやるからじや。ハア、何と是はどう有ふ、私暫く廣瀬に居た故、べれく萬歳を覺て居ます。坊主めに舞して私が小鼓、管絃の代りには成まいか。素袍烏帽子がないけれど、そこらは、かぐれ様の一徳、常の形でも大事ないく、」逆「ヲ、それ究竟」と、御前に出、「樂人延引仕る中、廣瀬村の萬歳、瀧口へ參り候。梅の早咲と申、春に先立參るも吉左右、庭上にて千秋萬歳、相勤させ候はん。ソレ御免なるぞ、始めませい」と、仰もあいに愛らしく、時の幸才若の、扇開いて、萬歳萬歳と有難かりける我君の、御惱しづまり、御目も開き給ひけるは、誠に目出たふ侍ひける。昔の京は難波の京、中の京と申は、志賀辛崎の松の色、かはりし物は、我々が身の有様、君はかはらせ給ふなと、千年の齡奉る。忠臣の柱は月卿雲客、日本の柱は日天子、三本の柱は左近右近の花橋、四本の柱は紫宸殿、五本の柱は五畿内安全、八重九重の内迄も、治り靡く君が代の、千代に八千代を小石の、祝ひ壽き申にぞ、甚敷感おはしまし、帝いしくも祝しつる物かな。誰か有、祿取らせよ。管絃糸竹も祝義は同じ、今日の舞樂も事終れば、百官百司も退出有。朕

念なふ一思ひの外に
得一疾く

浮木の龜一云々
法華經に佛難
得値如優曇波
羅華又如一眼
之龜值浮木之
孔とあり
水魚の中一君臣
睦しき事

も夜の御殿に入ん。思へば我は斯の如く、錦繡羅綾の内に座し、民の艱苦を露しらず、徳なふして榮華に耽る、神の照覽勿體なや」と、御身の事は知り給はず、民を憐む御詞、各顔を見合せて、額に涙の天が下、暫し入御なし奉る。芝六跡にさし寄て、「仰付られた彼爪黒の女鹿、近邊の山々尋ても、扱少い物、是迄ついに見當らず、漸昨日見付出し、念なふ射とめ、乳の下の血汐を絞り、壺に認め置ました」涙「テ、太義々々。正に天下の用に立る、得難き鹿の手に入事、偏におことが忠義の働。父内大臣鎌足、得より入鹿が亂を察し、罪なくして身退、興福寺の後なる山上に取籠、天皇御惱祈の祓百日の行ひ、則今日が満願の終。帝此家にまします事、先達て知らせられたれば、明曉、六つの鐘を限り、密に是へ來らるべし。其時こそ其方が勘氣も赦免、改めて元の家來、立上太郎利綱」芝ハア、コハ有難し忝し。この年月の念願成就、浮木の龜共、優曇華共、此上ながら鎌足公へ、お執成仰ぎ奉る」涙「必氣づかひ致すな」と、主従水魚の中臣氏、土に生ても穢なき、薬屋の御殿へ入にけり。様子立聞女房の、嬉しい中の心懸り、「草臥さんしよ」と立寄て、雉イヤアノ此方の人、わしやお前に問たい事。今朝の噂に、マア聞しやんせ、きつい法度を知りながら、春日の牝鹿を射殺した者が有逆、嚴しい吟味がござんすけな。

釘ぎつくりー胸むねに

築山つきやま―蓋ふたきにか

親身しんみ―深ふかみと

よもやとは思へど、萬一まんいち一いち匱相けいさうでお前まへやなど、そんな覺おぼへはないかいな」と、空問そらとこひかけるも夫思つまふ、しかも牝鹿めしかは覺おぼへのぎつくり、芝しばハ、ハテ譯わけもない。奈良ならの傍あたりは、赤子あかこでも知して居ゐる鹿しかの法度はつど。石礫いしごづめ詰つめにあふ事ことを知しつゝ殺ころす白癡たはげが有物あつものか。したが、鹿しかといふは質置事しちおきこと。一體いつたいしがなないおれなれば、ぶち殺ころすは常住じやうぢやうの事ことと、云いひ粉こならしてもどこやらが、鹿子かのこまだらの雪見酒ゆきみざけ。芝氣しばきが築山つきやまで一いっ杯はいせふ、喫爛かつかんつきや」と女夫中めせうぢやう、醉めどた顔かほでも濟すやらぬ、積しやくを押おへて入いりにけり。村むらの歩人あひまが表おもてから、「コレく興福寺きふくじの塔頭たつとうから、鹿殺しかころしの科人かじん、癩師れふし中間なかまに極きはまつた、友吟味ともぎんみして訴人そじんしたら、御褒美ごほうびを下くださると、とお觸ふれが廻まはつた庄屋しやうや殿どの迄まで早はやござれ」と、云いひ捨歸すてかへる高聲たかこゑは、小耳こみみにはつと三作さんさくが、若爺もしじ様の身みの上に、詮義せんぎかよらばどふせふと、稚心せまなこころのやさしくも、眞實案しんじつあんじ侘住わびずみの、手習文庫てならひぶんこ破やれ双紙ふたじ、筆ふでくひしめし何なにやらん、七ななついろはの清書文章きよかきぶんじやう、かき搜さがしやの椀わん白弟はくおに、「コレ兄あに様さまさつきの箱下はこしたされや。くれぬとコリヤかふじや」と、引ひたくる筆ふでのしんみは憎にくからず。三さんチ、夫それもやらふが、コレ杉松すぎまつ、兄あにが頼たのむ事こと聞きてたもるか、此狀このじやうを持もつての、太義たいぎながら興福寺きふくじの門かどを擲たいて、寺中じちゆうへ差上さしかますといふて渡わたして來きてたも「杉すぎム、そしたら何なにぞ賃下ちんかさるか」三さんやる共ともく、賃ちんには春日野かすがのの火打燒買ひうちやきかてやる」杉すぎ又啞うそ、欺たぶすのじやないかや」三さんイヤく

白地の神一知らぬ及び紙にかく

かくまい一貯蓄

差當一さし當てると當座

ほんまじや」杉「そんなら合點じや。往て來ふ」と、すかさるよのも、偽寄のも、年より賢き杉松が、狀懷にちよか〜走り、見送る兄が書残す、筆の命毛器用なが、仇と白地の神ならぬ、折もこそ有ひそくと、表に窮ふ捕手の侍「ソレ」とかけ聲かけ入て、駈行奥より駈け出る芝六、「待たく、こりや人の内へ、理不盡に狼藉千萬、ム、聞へた、お前方は鹿奉行のお手下じやな」捕手「イ、ヤ此家の内に吟味有て、入鹿大王より詮義の役人。儕が内に匿ひ置た者有べし、眞直に白狀」と、かさにかよれど胸共せず、芝ハア何の事かと思ふたら、私じや逆、貧乏な狩人でも、相應のかくまいは致さいでは、それを御吟味とは、お役人に似合ませぬ。仰山なお侍様」捕手「ヤアとほけな。かくまひ置たはお尋の天皇、井に鎌足が躬淡海。是非あらがへば此通と、傍に有合ふ三作を、取て引寄指付る、刃は胸に差當る人質取れて、芝ハア〜」捕手「サア〜何と」と詰かけられ、芝「先々お待下されい。如何にも申譯致しませふが、爰ではどふも申されず、大庄屋の方迄参り、委細白狀致しませう」捕手「ム、然らば早く、サア歩め」芝「ハツ〜、コリヤ、三作、わりや戸をしめて、隙に氣を付いと云へ。いざお役人」と打連て、毒蛇の口の一思案、心は跡に出て行。一間に様子立聞淡海、「局々」と呼出し、「芝六が心底、忠臣無二と

思ひしが、子に絆ほたされて大事を誤あやまる、今の行跡ふるまひ、拷問がうもんに及およばよ、慥たしかに白狀はくじやう。どふも天皇てんわう長く爰こゝには置おきまされず。今宵こよひの中に山越やまごえに、お供ともして立退たちかん。皆々みな密ひそかに用意ようい々々。我われは猶なほも芝しば六むつが、歸かへりを待まちて一詮ひとしげ義ぎと、鏝つぼもじ元もとくつろけ立上たちある。「マアくくく」お待まちなされて下さりませ」と、お雉きじは駈かけ出いで手てをつかへ、「お疑うたがひもさる事なれど、あれ程ほどに迄思おもひつめ、御ご勘氣かんきを赦ゆるされふと、心を碎くだく夫をつと芝しば六むつ、中々はくじやう白狀はくじやう致いたす様ような、未練みれんな心でない事は、私わたしが存ぞんじております。一先ひとまづ歸かへりをお待まちなされ、其上その上胡亂うらんな事ことが有あれば、一天てんの君きみにはかへられぬ、夫をつととは云いせす私わたしから切きりかけます。其時そのときにこそ心底しんていの、明あき暗くらさは今宵こよひ一ひと夜よ、憚はやりながら私わたしに、お預あげなされて下さりませ」迷まよム、實ひに一命ひとことをさし出し、頼たのるゝ程ほどの立上たつ太郎たろう。とはいひながら草くさも木きも、我大君わがみの國くになれど、今は草木くさきにも心こゝろ置おくゝ此時節このとき、すはといはば用捨もちはならず。御前ごぜんへ參まゐつて返事へんじを待まちと、心こゝろゆるさぬ關せきの戸とは、破やぶれ障子しやうしのつどくりも、反古ほんこにせじと間まに合紙あひがみ、書かきあつめたる胸むねの中なか、母ははの心こゝろを三作さんさくも、俱ともに案あんずる折せからに、興福寺こうふくじの衆徒しゆだ鹿役しかやく人にん、先さきに立たつたる杉松すぎまつが、しるしの門口かどぐち指さし覗のぞき、「ム、科人しがにんはあの盼せがれよな。捕とた」といふや、否應いやおう云いさす三作さんさくを、取とり引立ひだ用意よういの早繩はやなは。お雉きじ驚おどき、「コリヤ何なに事こと。大事だいじの子こをどぶするのじや」役人やくにん「ヲ、鹿しかは春日かすがのつかはしめ、殺ころした者は古ふるへより、

大垣の刑―所謂
石子詰
常推―あて推並

つくともふ―と
んともふ

大垣の刑に行ふ大法」雫エ、イ其御詮義は聞へたが、狩人も多い中、外の吟味はなされ
いで、此子一人が知た様にあんまりな常推。但し證據でもござりますか」役人ハテ證據
なくて名を指そふか。其駈が所爲といふ事、慥な訴人有て明白」雫ム、其訴人したは何
所の奴じや。覺へもない無實を云ふやつ、切刻んでも飽足ぬ。其訴人め、サア爰へ出し
てお見せなされ」役人ヲ、訴人は此駈、現在の弟が注進、よもや相違は有まい」と、聞て
恟り、雫コレくほん、吾儕はさつきにから何所へ往て居やつた」杉アイわしや此状も
つて、あの坊様の内へ往て、連立てもどつた」と、いふに怪しと引取て、讀度々に胸どき
どき、「何じや、お尋の鹿を殺し候者は、私兄の三作に違ひござなく候。そんなら此書付
を」杉ア、わしが持て往た。サ、兄様質下され、饅頭欲い」と頑是なき。雫エ、何いふ
のじや。つとともふ性もない子供のいふ事。取上て下さりますな。ノウ三作、何のそな
たが其様な、法度を破つてたまる物か。サアちやつと云譯しやいの」と、つき出せば、顔
ふり上、三いかにも弟が訴人の通り、鹿殺しは私でござります」雫コレくくそなた
は氣が上つたか。狼狽所じやないぞや」三イ、エ狼狽はしませぬ。わしが手にした事
覺へのない狩人の、中間の衆に吟味がかより、ひよつとどふした人違へで、爺様の難義

ないじやくりー
く 歎啼となしにか
十三年一三作の
年

にならふも知れぬ。夫が悲しさ、尋常に名乗て出ます。常々お前の咄しにも、今の爺様は、義理の有親じや程に、猶太切に孝行にせいと、ソレ云しやつたを、わしや能ふ覺へて居ますわいの。わしが仕置に合た跡で、爺様の泣しやれぬ様に、京の町へ奉公にやつたといふて置いて下され。是からは杉松を私と二人前可愛がつてや。鹿や兎の命を取ば、どふで末は斯ふなるもの、せめてあれ一人は、狩人さして下さるな。そればつかりを頼みます。さらばでござる母様」と、親の代りに罪科を、引受る氣の立派さを、思ひ合せて、雉「ハアはつ」と今更未練なとめ様も、あらがいやうもないじやくり、「扱もく、健氣なといはふか、産だ子ながら恥かしい。義理有後の親夫、わしやまだ恩を得送らぬに、大人も及ぬ發明は、一生の智恵も壽命も、十三年につどめたか。こんな子を持た親と、ひけらかしたい稀な子を、世にも稀成大垣の、土の中へ生ながら、石礫詰で殺すとは、なんほ前世の約束でも、余り惨い約束事。イヤくくく、なんほふでも殺さぬくくくと、我子にしつかとしがみ付、涙の瀧にしめるにぞ、いとど喰入縛り繩、役人「ヤア成敗極る科人に、返らぬ諄言。今宵の中は寺中の法事、明六つの鐘つくを相圖に、山本の土中を掘て石礫詰の刑罰。最早七つ、もふ一時、刻限移る」と引立る。一なふ胸欲な。いは

正體云々—正體
なく腰もぬけて

ば畜生一生を、殺した科をそれ程の、御成敗にも及ぶまい。御出家のお慈悲には、どふぞ助けて下さりませ。叶はぬ事なら土の中、母も一所に埋んで」と、取付島も袂の岸、涙に漂ふうかれ船、繩目の綱は親子の別れ、見返る姿霧霞、飛が如くに引立行。母は正體腰もぬけ、「ヤレ三作よ待てくれ。思へばく今日の日は、我身一人の悪日か。由緒正しい武士の子を、一生狩人山賤に、朽果さする計かは、所の法に行はれ、非業の死は殺生の、罰か報ひか悲しや」と、土邊に蹉跎と身を打付、聲をはかりの憧れ泣き、患を拂ふ王箒、いかな大事も好物に、酔てはころり芝六が、機嫌上戸のちろく戻り、「ヤア女性是におはするか。此冷るに地邊に轉りは、扱は貴様も酔醒しか。久しぶりの色事、ドレ抱てやらふ」と手を取ば、雫ヤア此方の人か。ハア悲しや」芝南無三、きやつ泣上戸。我等は悲しふても笑ふ、貴様は目出たい事にも泣。イヤ又此様な嬉しい折から、祝うて一つ泣給へ」と、餘念他はいも泣顔を、見せじと妻も氣を取直し、泣々笑顔繕ひて、雫「ホンニ又何處でやらきつい機嫌で戻らしやんした。そふして、マア最前の捕人の侍、取巻れてござんした、其仕廻はど付たへ」芝サレバく、そこをぬかつて能物か。此能ふ廻る舌をもつて、立板に水を流す如く、とんと匿ませぬにて、すつぱりと云拔て戻つ

雨降て云々一物の治まる前に騒ぎのあるといふ諺

嬉しいも云々一嬉しいは夫嬉しいは妻の心

た。雨降て地塊あめふつ ぢかたまると、是からは猶あなた様も、帶紐おびひもといっておかくまひ申まじよいといふ物じやナそじやないか。ヤお天子様の御機嫌ごきげんはどふじや。マア〜悦こんじやうびや、今日の日天ひつてん様が、がぐれ様さまにならしやりましたらこそ、斯かふいふ内へお成なりなされて下さるといふは、有難あがたいといはふか、忝かたじけないといはふか、目出めでたいといはふか、嬉しいといはふか。是こが悦あがたばずに居られふか。ナそふじやないか。まだ嬉しい事が有あは。明日あすの明六あけつがごとんと鳴なると、鎌足かまたり様が爰へござる、そこで勘當御赦かんだうおゆるされる筈、淡海たんかい様の請合うけあひじや。口頃くちごころの願ねがひ叶かなふは明日あす、余あんなり嬉うれしさ身祝みいはひに、香酒屋のんざかや叩たたき起おして、御神酒おみき五合ごがふ供かへた。エ、忝かたじけない〜。コリヤ坊ぼやう主ぢよ、あすから元の侍もとはさむらいに成なつて、われにも大小だいせうさよすぞよ。ヤ兄あには何所どこに居ゐる。三作さんさくよきよく〜」は胸むねを裂妻さくの苦くるしみ、雉けし、イ、エイナ、作さくはお前まへの戻かへりが遅おそさ、一人獵ひとりれつに行ゆくといふて」茅ちやうエ、夜よの内に何所どこへ滅相めつさうな、もふ獵師れしはさよぬ。誠まことの弓取ゆみどりに仕立したてるは、あすの夜よが明次あけしだい第だい。イヤもふそろ〜白空しらみかけるぞ、出世しゆつせの雲うみが見みへるぞ〜。有ありがたい〜、早はやふ明六あけつが鳴なつて下くだされ天道てんだう様さま、頼たのみます〜」と、祈いのる夫をつとが空そらを見みつ、覗のぞく表おもても裏表うらおもて、夜よ明あけは我子わがこの最期さいご時とき、どふぞ此夜ひやくねんが百年ひゃくねんも、明あけずに有あつてくれかすと、胸むねの阡陌ちまたの色々いろ々に、嬉うれしいも六むつ、悲かなしいも、六むつつ無量むりやうの物思ものおもひ、「ア、おりやもふ今夜こんやは、てうど元日げんじつを待まち心

いねつまふ一嫁
よう
むそく一無駄

廻し者一問諜

地。果報は寐て待、ちつとの間いねつまふ。坊主はおれが懐に」と、こつほり被る蒲團より、早とろくの草臥寐入、何にも知らぬ悦び寐顔。夫といふたら三作が、心もむそくに夫の命。夫も悲しよ、我子も可愛し、心は千々に鳴鐘を、早撞きいだす興福寺。雫ハア南無三寶。アノ鐘の數に、縮まる子の壽命。一つの命を二つに分け、養親への孝行心。ほめてやつて下され」と、云もいはれぬ女房が、心の苦痛三つ四つ、重て響く胸先は、斧鉄に打ると心地、五體五つにいつの世の、報ひを爰に修羅の鐘、打切六つは、ヤア知死期か、とわつと叫ぶは一時に、蒲團の中も血の涙、寐入伏たる稚子の、咽ぶへ疊にぬふたる刃、雫ヤア杉松をむごたらしい。酔狂ひか亂心か」と、涙もいつそ狼狽て、咽へ流ると靱れ泣。芝六居直つて聲を上げ、「中將淡海公へ申上る。立上太郎が心底を御疑ひ遊ばされ、最前の捕人は、拙者が心を引見給ふ鎌足公の廻し者と、氣は付ながら、情ない人質に心迷ひ、彌もつて御疑ひを重ねたれば、天子も爰には置給はじ、冥加に叶ひ、一天の君を匿、申身の大慶も水の泡、勘當御免もなき時は、生ても死ても返らぬ心外。勅を切ても他言致さぬ魂を、今改めて御覽に入る。コリヤ女房、張詰た太郎が義心、大事の心底見せ損ふたは、三作といふ其方の連子、元は秦の益勝と云ふ樂官の女房、蝦夷子の

讒ざんにて潰つぶれた家いへ、力ちからに成なつて下くだされ、と頼たのまれての後のち連づれ、義理ある有子ありが枷かせに成なつて、鎌足かまたり公こうに
 根性こんじやうを見下みくだされたが口惜くちをさに、指殺さしころしたは、二人ふたりが中なかに出生しゆつ仕した此杉松すぎまつ。科まがはなけれど
 主人しゆじんの面晴めんはれ、鬼おにになつてと酔よつた顔かま、酒さけではなふて劔つるぎを呑のむ。侍さむらいの義理ありが敵かたきじやと思あひ諦あきら
 め、坊主ぼくすがかかりに随分ずぶん兄あにを、可愛かほがつてやりやいの」と、どふど座ざして泣なければ、雙ふたつ
 ウコレ夫程おとこに思おもふて下くださる、其兄そのあにの三作さんさくは、鹿殺しかころしの科人まがじんになつて、縛しばられて行いたはい
 な」芝しばヤアくくく、すりやおれが科まがを身みに引受ひきうけて、名乗なのおつて往いたか。エ、それ殺ころし
 ては」と、狂氣きやうきの如ごとく駈かけ出す、弓手ゆんでの岩壁がんぺきに、「太郎たらう暫しばし」と聲有こゑて、内大臣ないだいじん鎌足かまたり公こう、神
 事じの禮服らいふくに小忌衣せみころも、心葉こころはの冠かぶり梅うめが香かの、匂におひ残のこれる采女うねめの御方おんかた、手てに捧ささげたる内侍所ないしきところ、怒い
 然ぜんと出給でひ、雙ふたつ立上けんじやうた太郎たらう心底こころ慥たしかに見届みこぎたり。我敵われかたきの亂みだりを避け、餘所よそながら守護しゆごする天
 子てんし。一日いちにちにても其方そのかたが、御難おんなんをさけしは、適あつはれ忠義ちゆうぎ。入鹿いしかが心こゝろをかけたる采女うねめ、久我くがの助すけに
 云いひふく、猿澤さるさばの池いけに入水いれずみとして、此興福寺このうふくじの山奥やまおくに、鎌足かまたり諸共しよご隠かくれ住すみ、今日こんにち計はからず汝なんぢが
 勅せがれ、大垣おほがきの刑けいに行いふ所ところ、不思議ふしぎに命助いのちたすけつたり。三作さんさく参まゐれ」と仰おほせ、したかみしめられた
 と、携たづへ持もちし寶たからの箱はこ、明あけて我子わがこの無事むじな顔かほ、「ヤアまだ生いきて居ゐてくれたか」と、思おもひがけ
 なき夫婦ふうふが悦よろこび、雙ふたつ、不審ふしん尤もつと、天皇御惱てんかうごなうの祈いのりの爲ため、天あまの岩戸いはだの古例これいを引ひき、天照太神てんせうたじんに

出御せふ一ぞふ
は候ふ

祈誓をかけ、百日の行滿する今日、争ひがたき神の力、刑罰の地に掘穿つ土中に、怪し
き光り物。能々見れば、先年失させ給ひたる内侍所、神璽の御箱、入鹿が父蝦夷子大臣、疾
くより謀叛の根ざしにて、埋隠せし二色の寶、顯れ出しは是正に、神明の助け給ふ三作
が命。今改めて鎌足が三代の忠臣。さりながら鹿を殺せし春日の掟、同じ血脈の弟が、死
骸を埋刑罰の、表を立て菩提の爲、印の石の其上に、突鐘一字は鎌足が、改めて建立せ
ん」と、仰は今に、曉の、六つに死したる七つ子の、數を合はして十三鐘の、音にぞ哀殘
りける。鎌足重て、「此八咫の御鏡は、天照す御神の、御影を寫せし御正體、勿體なくも
蝦夷子大臣、穢れし土中に埋め置、其故にこそ一天の御影を曇せ、御目盲させ給ひしも、
日月の鏡曇りし故、我行法の今日に當つて、御鏡出させ給ふ事、常闇の世の岩戸を開き、天
照神と天皇の御對面の時至れり。出御ぞふ」と奏聞の、聲に應じて淡海公、御手を取て
立出る。折から向ふ鏡の光り朝日の影に暈きて、忽御目も明らかに、坐、ナウなつかし
の帝様、采女是に」と走り寄、互に床しき物語り、御戀中も恐れ有。兼、ヤアく、太郎、汝
が射たる爪黒の鹿は入鹿が調伏にて、頓て太平萬乗の御代しろし召、暫くも、民間に落
給ひしは、天より地中に落給ふ、是ぞ稀なる天智帝。御目も將に秋の田の、刈穂の庵の

假御殿、木の丸殿に准へて、今日出陣の城廓に、惡魔追伏興福寺は、我藤原の氏の寺、いざや是より臨幸」と、先をはらつて鎌足の、威風凛々論言の汗か涙の露にぬれ、草葉に置る芝六が、妻戀雉子や子故の闇、明てもくらき六つ七つ、十一、十二、十三鐘の、古跡を今に傳へける。

第三

縣めし—地方官
の叙任式
兩眉—烏帽子の
前の名稱

奈良の都の八重九重、禁裏守護の太宰の館、入鹿公のお成迎、嚙き渡る奥女中、荒牧彌藤次一間を出、「コリヤ仕丁共、今日は入鹿公、御目出たの御悦びに、奈良の町へ入込の諸職人、商人、藝者に受領を下されんとの勅詔。相詰たる町人共、一人づつ呼出せ」「はつ」と答へて立出る、縣めしかや諸人に、司を給て夫々に、國名を付し烏帽子子の、始めにかけし烏帽子屋が、身を立烏帽子兩眉は、三大臣のお召迎、高き位や懸烏帽子、十二の冠式法の、烏帽子屋なれば平七を、頭平と受領なされける。跡へ出たは烏帽子に白丁、彌藤次屹見、「フウ其方は神職な。神職ならば何故、吉田へ參つて受領を受ぬ」白「イヤ拙者めは鹿島の事觸。當年は辛の卯の年、崇り年とござつて、鹿島の御寶殿よ

でつかちない
大なる

名にしあふ一
名にしあふ一
付るにかく
びんざさち一
比
丘尼の持つ板

岩楠一いはんに
かく

り、でつかちない光り物が飛出、神の扉が八文字に披け、神馬の四足に大汗をかいてご
ざる。禰宜、神主、是を歎き、御湯を捧て七座の齋。時にお鹿島の御託宣に、氏子共が
下用櫃にしやりを切して、むらつぎをするで有と、人の物でも手廻り次第、打殺して其
日を凌げ、むくりこくり、地の底より潤はして、米は下直に錢は高ふさしてやるとの御託
宣でござる。無上禮法、新兵衛、嘉兵衛、拂ひ給へ、清めて給ふ」と、しやべりける。彌、扱は
汝事觸よな。向後そちが受領には、口松の差出の頭佐平次」と、ゆるせし跡へほつとし
よ髪、云ねど手足黒々と、鍛冶屋の木槌の衆、てんからり、ころり、てんくからりの
相槌に、打や打物、元が焼刃の焼物なれば、備前の守とや名にしあふ、櫻に色香取交て、
てしな
手品やさしきびんざさら、京の水色よい染上の、砥の茶小紋に見初て染て、酔てじやら
くら笹の葉小紋。比、今夜、必かならずやいの、松葉小紋の戸明て門に、ちつとやつて下
ん」彌、シテ儻は伊勢か熊野か」比、イヤ私は伊勢比丘尼」彌、夫ならば比丘尼の司。お兩な
んど」と岩楠の、慳作りのどつてう聲、「アイおらは攝務西成の郡、上福島の船乗でござ
ります」彌、夫ならば大名の船歌、上つ方には珍らしからん、諷へく」の聲につれ、歌
やつるつと共、いつきやのふ來てな、小側に立より見て有ば、おんめんもとはころり、こ

願人坊主——一種
の乞食坊主

ろりんなころく共、こんころがしやりかの、しやなりんがちよろよ、けんれんばまた
 のいよほん、ほんほわか枝や、はんは葉も、イヨエ榮へやはんは葉も、ろやんはいよ、イ
 ヨへさらへ。諷ひ納めし船歌に、禰藤次は聞入て、「チ、出かしたく。此後は其方を、船
 の頭となすべし」と、云しより、名を船頭と名付し跡へ道心者、風呂敷肩にひよつかひ
 よつか。彌コリヤく汝、所化ならば上人和尚に成たい望か」坊イヤく愚僧は願人坊
 主。寺號をお赦し下さりませ」彌ム、願人とは何の宗旨」坊されば八宗九宗をもれ、二
 季の彼岸は鉦太鼓で、町々を六齋念佛、お目にかけふ」と風呂敷より、取出しはじめ
 太鼓の拍子。歌やあんやうりうしく、なつてんりうたん金銀花咲いた、銀杏金柑陽梅
 寒梅、瓢箪鳳仙花やあん鐵仙花く、梅檀沈丁芙蓉林檎、長春半夏草、エ、スエく
 りよ、エ、スエスリヨこんりやう、エ、ス、リヨ、こんりやうこん、しんこんりやう、こ
 んしんく、こすへぶくくいしせほろみとすと、打納め、扱盆前の施餓鬼には、饒鉢
 なんと打鳴し、法界の施餓鬼くと六字詰。七月二十四日には、地藏菩薩を脊たら負、一
 つや二つ、三つや四つ、十より内の縁子は、小石拾ふて塔を積、一重つんでは親の爲、二
 重積では郷里兄弟、我身の爲と回向する。庚申にはとよ打て、庚申の代待、扱傘に、赤

しんぞいー退屈

友禪ーいふにか

出吹ー黄金の事

前垂まへだれを腹こしに巻まき、住吉踊すみよしをどり、歌うた、四社ししやのお前で扇あふぎを拾ひろふた、扇あふぎめでたや末繁昌すゑはんじやう、サ吉住すみよしさま様の岸きしの姫松ひめまつめでたさよ。白しろかなかねのべてのふ、襷たすきにかけて、よねくはかるせきのと、せんととのやさらばくエ踊をどり仕廻しまへば彌藤やせうじ次も、「是これはしんどい宗旨しうじじやな。向後きやうごうは其方そのかたを、あかつきさんはいはうじ

曉あけ山西方さんしやうほう寺てらと、寺號じがうをお赦ゆるしなざるよぞ」坊ぼくハア、有難ありがたし忝かたじけなし」と、悦よろこび勇ゆうむ春駒はるこまは、歌うためでたやく、春はるの初はつめに、春駒はるこまなんど、夢ゆめに見みてさへ好よいとや申まうす。ドウくドウく三吉さんきち乗のりつたか、右みぎの袂たもとに三七さんしち三夜さんや、左ひだりの袂たもとに三七さんしち三夜さんや、兩方りやうほう合あせて六七ろくしち六夜ろくや、ドウくくくく勇ゆうみ舞まつたる春駒はるこまが、轡くつわの紋もんもきつぱりと、能男よせい共とも友禪ゆうぜんの歌うた伊達いただな下著したぎを

一つ前まへ、横目よこめつかふて白洲しろすにつくばい「私わたしは堺さかいの素人しろうと淨瑠璃じやうるり、三右衛門さんゑもんと申まうすもの、政太まさた夫いふは播磨はりま、若太夫わかたは越前えちぜん、筑前大和ちくぜんやまとと受領じゆりやう致いたす、是これは大阪おほさかの名人めいじん藝げい、私わたしは太夫たいふ號がうを下くださらば、有難ありがたふござります」彌やニ淨瑠璃じやうるりを語かたるとな。幸々さいはひ、奥女おくぢやう中ちゆうも聞きたがる。無間むけんの鐘かねを所望しよまう々々「三さん是これは迷惑めいわく、私わたしはちやり聲こゑで、歌うたふ事は参まりませぬ」いかぬを是非せいひにと權威けんゐの所望しよまう、迷惑めいわくながら聲こゑ張はり上あげ、「テ、テンく、テンく、石いしにもせよ、金かねにもせよ、心こゝろざす所ところは無間むけんの鐘かね。其金そのかね爰こゝにと三百さんひゃく兩りやう」深山みやまおろしに山吹やまぶきの、花吹はなぶきちらすわれ聲こゑにて、語かたれば「扱こも怖こはい聲こゑ。最前さいぜんの藥罐やくわん屋やと、一いつ所に置おいたら能よからふ」と、どつと笑わらひを催もよ

白書院一知らず
にかく

ふせり。彌「チ、一興々々面白し。梅が枝は、諸木に先立咲花なれば、三右衛門も向後
は、咲大夫と改むべし」と、仰に「はつ」と悦びて お禮申せば「残りし受領、又明日」
と云渡し、いづれも白洲を立出る。召に應じて大判事清澄、袴の襷積も角菱有、不和成
中の定高が屋敷、互にそれと白書院、目禮もせず突つと通り、大「入鹿公の御座の間へ、誰
そ案内仕れ」と、云捨て行んとす。定高聲かけ、「先暫く。珍らしや大判事殿、太宰の小
貳が跡目を預る妾が屋敷、挨拶もなくお通りは 女と思ひ侮つてか。但し武家の禮義御
存なくば、少と御傳授申そふか」と、詞の非太刀襦袢、擗き、騒がぬ清澄空嘯き、「小貳存 生
より、領地の遺恨に寄、此屋敷の内へは、今日迄足踏もせぬ大判事、入鹿公のお召に寄
て參つたは、勅詔を重んずる故、皇居の間へ出仕の心。女童に用なければ、挨拶する
口は持ぬ」定「イヤ夫なれば猶もつて、今日入鹿様お成なれば、大内も同然、大判事に御
疑ひの事有て、此定高に吟味致せとの勅詔。此詮義濟ぬ内は、一寸も御前へは叶はぬ。
お扣へなされ清澄殿」大「ム、ハテ、珍らしき事を聞。君御詮義の筋有らば、檢非違使に
仰て、拷問有んに何の御遠慮、元來御疑ひ蒙るべき覺なし、生緩き女の吟味、受る様な
清澄でおりない。お身、見事詮義して見るか」定「チ、太宰の後家此定高が 急度詮義し

らぬ
おりにい—ござ

て見せふ」大「イヤ小癩こしかくな。其處退そここのいて早通まかりせ」定まかり罷なりぬならぬ」と根ねに持遺もちる恨こん、互たひに折をぬ老木おいきの柳やなぎ、松まつの間の襖ふすま押開おしかせ、「出御成しゆつぎよなり」と警蹕けいびつの、聲こゑに二人ふたりも飛とびしさり、恐おそれ入いたる計はかりなり、入鹿いるかの大臣だいじん寛然くわんぜんと、上段じやうだんの褥しじねより遙はるかに見下みくだし、ス「ヤア大判事だいはんじ、未明みめいより參内さんないせよ、と勅使さうしを立たつに甚はなはだの遲參ちさん。アレ見みよ、今日こんにちは午うまの上刻じやうこく、流星りうせい南みなみに出いで、北きたに拱たんだくするは、萬乘ばんじやうの位くらゐに卽丸つくまるが吉星きつせい。夫程それほどの事こと知らぬ大判事だいはんじでなし。但ただし、入鹿いるかに仕つかへるが不足ふそくと思おもひ、身みを退しりあか下くだころ、緩くわん怠たいなり」とときめ付つくれば、大「コハ御誼ごぎやうじ共覺ともへず。今一天四いんてんしよ海うみ、君きみの御手ごてに屬しよくするとは云いながら、いまだ殘黨ざんたう、先帝せんていに心こゝろを寄よる族やからあつ有あて、帝都ていごを窺うかがふ折せから、我等われらが領地りやうち紀伊國いのくには、西國さいこく南海なんかいの咽首のどくびにて、大事だいじの切所せつしよ、弓ゆみを張はり、矢尻やじりを磨みがく隙ひまなければ、思おもはざる遲參ちさん。其上そのじ忠臣ちゆうじん第一だいいちの大判事だいはんじに、何事なにことの御疑ごぎひ」と、憚はげなくぞ申まうける。ス「ホ、其十細そくしといつば、先帝せんていの妾者めかけもの、采女うねめの局つばねを、丸まるが后妃こうひに定めん、と行衛ゆくゑを尋求たうねめる所ところ、猿澤さるさはの池いけへ入水じゆすゐせし由よし、いかにしても合點がてん行ゆかず。察さつする所ところ采女うねめが在家ありかは、大判事だいはんじ、其方そのちうがよく知しらふがな」と、思おもひがけなき疑うたがひに、清澄きよずみ不審ふしんの眉まゆを顰しはめ、「コハ存寄そんじよざる義ぎ。其采女うねめの御事ごじは、猿澤さるさはの池いけに捨身しゃしん有ありしとは、誰知たれしらぬ者もの、ござなきに、我等われらが行ゆく衛ゑ存そんぜしなどは、何なにを目當めあての御仰ごんおほなるぞや」ス「ヤアとほけな。汝なんぢが盼せがせ久くの我の之すけ助すけは、采

陳ずる—いつは
る

女めが付人つけびとならずや。其親たる其方そちなれば、よも知らぬとは云いはれまじ。サア眞直まことすぐに白狀はくじやうせよ。陳ちんずるに置はては計はらふべき旨ねが有あり」定ぢやうイヤのう大判事だいはんじ殿どの、お聞き有ありしか、妾わらはに仰おほせ付せられし詮せん義ぎとは此事このこと。サア覺あへが有あらば申まされよ」と、云いはせも立たてず、大だいイヤ黙だまり召めされ。女をんなの差さ出しる所ところでなし」定ぢやうイヤ、ヤ勅ちやく諭うんを受けての詮せん義ぎなれば、勅答ちやくたふの有あり無なきに寄よつて、其座そのざはちつ共立ともたしはせじ」と、膝立直ひざたてなほし詰つ寄よつて、双方ふたう挑ひみ争いふたり。入鹿いりか大臣だいじん大口明おほぐちあき、「ハ、ハ、ハ、ハ、イヤ工たくんだり拵こしらへたり、定高さだかが領分りやうぶん、大和やまとの妹山いもやま、清澄きよすみが領地りやうち、紀きの國脊山くにせやま、隣國りんごく境目さかひめの論ろんに寄より互たがひに確執かくしつせしとは表おもての見みせかけ、内々ないくには申合ませ、古主こしうの帝みかどへ心こころを通とほはす儕等おのれらと、我眼わががん力ちからに違ちがひはせじ。さすれば天皇てんわう采女さいによめは、兩家りやうけの中ちゆうに隠おかし置おか置おくも知しらざる故ゆゑ、大判事だいはんじが詮せん義ぎを申付まうしつけた定高さだか、コリヤ其方そちにも此疑このぎひはかよるぞよ」定ぢやう是これは又君またきみの勅諭ちやくうん共覺ともあせぬ。夫この小貳せうにより、中惡なかあしき大判事だいはんじ殿どの、何故な申合まうしあはさふ様ようもなし。私わたしに迄いたり疑ぎひは恐おそれながら」ス云いふ女をんなめ、左程ひだりほど音信いんしん不通ふつうの中ちゆうなるに、大判事だいはんじが盼せがせ久くわ我が之助のすけ、そちが娘むすめ雛鳥ひなどりと、密通みつつう致いたし居ゐるは如何いかに。イヤ知るまじと思おもふか。盼せがせ共ともが縁えんに繋つがれたる汝等なんぢらなれば、兩方りやうほう共に吟味ぎんみは遁にれぬ。何なんと肝きんに答こたへふが」と、厭あく迄いたり邪智じやくちの一言いちごんに、何思なんしひけん大判事だいはんじ、席せきを蹴け立たて行ゆくとす。隙すかさず定高さだかが、刀かたなの鑢こじりむんと取とり、「コレ待給まちへ清澄きよすみ殿どの、屹相きつさうかへてコリヤ何國いづくへ」

過行―死去

尾箱やつ―無禮者め

且て―曾て
金打―武士の誓
にする仕業

大「何國へとは、親々が不和成中を存ながら、忍び逢ふ盼が不所存、引捕へて吟味せねば、子供が縁を幸に、和睦せしと云れては、我家の恥辱となる」定「ヲそりや此方も同じ事。一旦武士の意地、今更中が直りたい計に、娘に態と不義させし、と世上の人に蔑せられては、過行給ふ夫へ立ぬ。わらはも俱に」と、裾引上、駈け出す二人をはつたと睨め、入「私の趣意に立騒ぐ尾箱やつ。儕らが盼の不義を吟味はせぬ、丸が尋るは采女が有家サア何れからなりと早くいへ。何とく」大「イヤ盼が性根はいさ知らず、采女殿の義は且て存せず。我詞に僞有ば、弓箭神の御罰を請ん」と、刀すらりと抜放し、丁々と金打し、「此上にも御疑ひ有ば、いか程の拷問なり共、サア遊ばせ」と、どつかと座す。定「ヲわらはは逆も小貳が妻。家に換へて采女殿は匿はぬ。水責火責に逢逆も、知らぬ事は存じませぬ」と、詞するどにいひ放す。スム、然らば采女が詮義は追て。先汝らが面晴なれば、匿はぬといふ潔白に、定高は雛鳥を入内させよ。又大判事も、覺なきに相違なくば、久我之助を今日より、朕が目通りへ出勤させよ。急度其旨心得よ」と、何がな探る當座の難題。二人は胸にぎつくりと、答へも暫しなかりしが、良有て詞を揃へ、「斯右難き勅詔を、互の子供が違背致さば」入「ヲ、云にや及ぶ」と邊成、牛置櫻の一枝追取、「得心す

乘の趙高云々―
威勢に任せ鹿を
馬といはしむる
欠入―駈入

穆王が龍馬―穆
王に八匹の駿馬
あり

いそふれ―急げ

れば榮へる花。背くに置ては忽に、丸が威勢の嵐に當、眞此通り」と欄には、はつしと打
 折落花微塵、はつと計に親々の、心も共に散亂せり。猶もゆるまぬ大音上、ムヤア
 彌藤次、早く參れ。汝は百里照の目鏡を以て、香具山の絶頭より、急度遠見を仕れ。コ
 リヤ／＼、兩人よつく聞。若少でも用捨致さば、兩家は没收、從類迄も絶するぞ、性根を
 定め、早行」と、せき立詭意に親々の、思ひは千々の胸の中、見せぬおもてに忠と義を、張
 詰し氣のたゆみなく、打連てこそ出て行。誠に秦の趙高が、馬と欺く小男鹿の、入鹿が
 威勢ぞ類ひなき。かよる所へ中門より、追々欠入鎧武者、御注進と呼はつて、御白洲に
 頭を下け、「河内の國に武智郡司安彦、先帝に味方をして大鳥の城に籠りしを、官軍残ら
 ず馳せ向ひ、敵を攻付一晝夜に落城、大和に安曇の文次宗秀、當麻の邊に陣を取、南都
 を攻る其結構。馳向ふて戦ひしに、味方の官軍利を失ひ、残らず敗北仕る」と、息つぎ敢
 ず言上すれば、ムハ、ハ、ハ、ハ、物數ならぬ逆徒の奴原、朕馳向ふて微塵にせんぞよ。彼穆
 王が龍馬に勝れし希代の名馬、吉野の牧より狩出したる、其馬引」と、廣庭へ引出させ、
 欄より、ひらりと打乗、名馬の勇、手綱はいくり、しとくく、轡の音はりんくり
 ん、綸言誰か背くべき、大地狭しと馬上の勢ひ、刻む蹄も街の訝、「いそふれ、やつ」と

出陣の、駒を早めて三重駈り行。古への神代の昔山跡の、國は都の始めにて、妹脊の始
め山々の、中を流るよ吉野川、塵も芥も花の山、實世に遊ぶ歌人の、言の葉草の捨所、
妹山は、太宰の小貳國人の領地にて、川へ見越の下館、春山の方は、大判事清澄の領内
子息清舟日外より、爰に勸氣の山住居、伴ふ物は巢立鳥、訝と我と只二つ、經讀鳥の音
も澄て、心細くも哀なり。比は彌生の初めつかた、此方の亭には雛鳥の、氣を慰さめの
雛祭、桃の節句の備物、萩の強飯、奴の、小菊桔梗が配膳の、腰もすふはり春風に、柳
の楊枝はし近く、「ノウウ小菊、いつものお雛は御殿でお祭りなさるれど、姫様のおしつら
ひで、此山峯の假座敷、谷川を見晴し、櫻の見飽、雛様も一入お氣が晴てよからふの。
此方も追付好い殿御持たら、常住あの様に引ついで居たら嬉しかろ」ノウウ桔梗の何云
やるやら。何ほ女夫竝んで居ても、あの様に行義に畏つて計居て、手を握る事さへなら
ぬ、窮屈な契りは嫌や。肝心の寐る時は、離れぐの箱の中、思ひの絶る間は有まい」
と、仇口々も雛鳥の、胸にあたりの人目せく、「辛い戀路の其中に、親とくは昔より、
御中不和の關と成、逢ふ事さへも片系の、結ほれとけぬ我思ひ。戀し床しい清舟様、此
山のあなたに、と聞たを便り母様へ、お願ひ申て此假屋、お顔が見たさの出養生、爰迄

岩橋—いはぬに
かく

念彼觀音—普門
品の文句

は來れ共、山と山とが領分の、境の川に隔られ、物いひかはす事さへも、ならぬ我身の
儘ならぬ、今は中々思ひの種、いつそ隔て戀説る、逢れぬ昔がましぞかし」と、切なる思
ひかきくどき、歎けば俱に姉共、「お道理でござります。ほんにひよんな色事で、隣同士
の紀伊國大和、御領分のせり合で、お二人の親御様はすれく。雛鳥様と久我様の、妹
脊の中を引分る、妹山脊山。船も筏も御法度で、たつた此川一つ、つい渡られそふな物。
小菊瀬踏して見やらぬか」ハチ、滅相な。此谷川の逆落し、紀州浦へ一つてきに、流れ
て往たら鮫の餌食。したが申雛鳥様、お前の病氣をお案じなされ、此假屋へ出養生さし
なさつたは、餘所ながら久我様に、お前を逢す後室様の粹なお捌き。女夫にして下さり
ませ、と直にお願ひ遊ばしたら、よもや否とは「岩橋の、渡る事こそならず共、せめて遠
目にお姿をと、障子ぐわりりと縁端に、覗きこぼるゝ姉共。久我之助はうつくと、
父の行末身の上を、守らせ給へ、と心中に、念彼觀音の經机、案じ入たる顔形、手に取
様に、雛ノウあれく、机にもたれて久我様の、物思はしいお顔持。お積がなおこりつ
らん。エ、お傍へ行たい、コレ爰に居るはいな」と、いへど招けど谷川の、漲る音に紛れ
てや、聞へぬつらさ。「エ、しんき、こちらが思ふ様にもない。コレこつちや向て見たが

奥山一置くにか

折ちり下りと
難所一なくにか

よい」と、あせるお傍に氣の付々。ほんに夫よ、口でははれぬ心のたけ、兼て認め奥山の、鹿の巻筆封じ文、戀し小石にくより添、女の念の通ぜよと、祈願をこめて打磔、からりと川に落瀧津、波にせかれて流れ行。「エ、どんな、心の念は届ても、女力の届かねば、思ふた計片便、返事を松浦佐用姫の、石に成共成たい」と、平伏山の甲斐もなき。久我之助川に目を付、何國よりか水中に、打たる石は重けれど、逆巻水の勢ひに、沈みもやらず流るとは、重き君も、入鹿といふ逆臣の、水の勢ひには敵對がたき時代の習ひ。夫を知て暫しの中、敵に従ふ父大判事殿の心。善か悪かを三つ柏、水に沈めば願ひ叶はず、浮む時は願成就、吉野を假の御祓川、太神宮へ朝拜せんと、柏の若葉摘取て、谷を傳ひに水の面、見やる女中が「申々、今の小石が届いたか、久我様が川へ下りなさるよ。あの岩角のおり曲りか、川端がいつち狭い、幸のよい逢瀬」と、いふに嬉しき雛鳥の、飛立計、振袖も、裾もほらく、坂道を、折から風に散る花の、櫻が中の立姿、しどけ難所も厭ひなく、雛、ナウ久我様か、なつかしや」と、いふに思はず清舟も、「雛鳥無事で」と顔と顔、見合す計、遠間の、心計が抱き合、詮方涙、先き立り。雛、申請舟様、わしやお前に逢たさに、病氣といひ立、爰迄は來て居れど、親の許さぬ中垣に、忍んで通ふ事叶はず。女

鵲の橋—戀の媒

雛男ひなをびな雛ひなも、年としに一度いちどは七夕たははたの、逢瀬あふせは有あるに此こ様に、お顔見おまへながら添事そふことの、ならぬは何なんの報うひぞや。妹脊いもせの山やまの中なかを隔へたつ、吉野よしのの川がはに鵲くわくの、橋はしはないか」と口説くはくき言こと。聞清舟ききよふねも楫かぢ有あらば、早渡はやわたりたき床ゆかしさを、胸むねに包かみて、「道理だうり々々。我われも心こころは飛立とびたてと、此川ここのがはの法度はつご厳きびしきは、親々おやくの不和ふわ計けでない。今入鹿世いましかを取とつて、君臣くんしん上下じやうげ心々こころ々々、隣國りんごく近邊きんぺんといへ共、親おしみ有あらば徒黨たごたうの企くはだて有あるか、互たがひに通路つうろを禁いめて、船ふねを留とめたる此川ここのがはは、領分りやうぶんを分わる關せき所しよも同然どうぜん。命いのちだに有あらば、又逢事あふことも有あるべきぞ。今流いましたる水みづの柏かしはなる波なみにもまれて浮うかしは、心こころの願ねがひ叶かなふしらせ。入鹿いしかが詭おそて嚴げんしければ、我われも世上せじやうを憚はしかりて、此山奥ここのやまおくの隱住かくれずみ、心こころの儘ままに鶯うぐいすの、聲こゑは聞共きこ籠鳥ろうてうの、雲井くもゐを慕したふ身みの上うへを、思おもひやられよ雛鳥ひなどり」と、儘ままならぬ世よを恨うらみ泣なみ。舞まノウ又逢事あふことも有あふとは、別わかるゝ時ときの捨詞すてことば。譬たとへ未來みらいの父ちち様に、御勘當おんかんだう受うる共、わしやお前まへの女房にようばうじや。逆さかも叶かなはぬ浮世うきよなら、法度はつごを破やぶつて此川ここのがはの、早瀬はやせの波なみも厭いとふまじ、何國いづくいか成方なるかたへなと、連つれて退のて下くださんせ。わたしはそこへ行ゆます」と、既に飛込川岸とびこしがはぎしに、周章あわておどろ驚おどきとどむる秘こもり。「イヤ〜放しや」と泣入娘なきいりむすめ。齊ただヤレ短慮たんりよなり雛鳥ひなどり。山川やまがはの此早瀬ここのはやせ、水練すゐれんを得えたる者ものだに渡り難わたり難がたき此難所ここのなんじよ。忽命たちまちいのちを失なふのみか、母後室ははごうしつに歎なげきをかけ、我われにも彌々いよいよ憎にくしみかよる。科しがに科しがを重かさねる道理だうり、必かならず早はやまり召めされな」と、制せいする詞ことば一筋ひとすぢに、思おもひ詰つめ

難所—なきにか

定高—健にの意
をかく

道分—見にかく

襦—うちかくる
にかく

落去—落者

胸くしやつく—
目がまじくす

たる女氣も、今更弱る折こそ有、「大判事清澄様御入なり」と、しらする聲。「はつ」と驚き
 我がの助け、歸るを名残、押とむるも、我身を我身の儘ならず、舞「コレの不待て」の聲計、
 「後室様御出」と、告る下部に詮方も、なくく、庵の打霑れ、登る坂さへ別れ路は、力難
 所を行心地、空にしられぬ花曇り、花を歩めど武士の、心の峻岨刀して、削るが如き物
 思ひ、思ひ逢瀬の中を裂、川邊傳に大判事清澄、こなたの岸より太宰の後室定高にそれ
 と道分の、石と意地とを向ひ合ふ、川を隔てて、定「大判事様、御役目御苦勞に存じます」
 と、聲襦をかき取り、夫の魂、放さぬ式禮、清澄も一揖し、「早かりし定高殿、御前を
 下るも一時、参る所も一つなれ共、此脊山は身が領分、妹山は其元の御支配、川向ひの
 喧嘩とやら、睨合て日を送る此年月、心解るか解ぬかは、今日の役目の落去次第、二つ
 一つの勅命、狼狽た捌めさるな」と、胸くしやつく茨道、脇へかはして、定、仰の通り、入
 鹿様の御説意は、お互に子供の身の上、受合ふては歸りながら、身腹は分ても、心は別
 別、若あつと申さぬ時は、マアお前にはどふせふと思し召「大」知れた事、御前で、承はつ
 た通り、首打放す分の事さ。不所存な勅は有て益なく、なふて事かけず。身の中の腐は、
 殺で捨るが跡の養生。畢竟親の子のと名を付るは人間の私、天地から見ると時は、同じ世

界に涌た虫、別に不便とは存じ申さぬ」定「ハテきつい思し切、私は又いかふ了簡が違ひ
 ます。女子の未練な心からは、我子が可愛て成ませぬ。其かはりに、お前のお子息嫌の
 事は、眞實何共存じませぬ。只太切なはこの娘、忝い入鹿様のお聲のかよつた身の
 幸、譬とふ申さふ共、母が勸て入内させ、お后様と多くの人に、敬ひ傳かそふと、思
 へば此様な嬉しい事はござりませぬ。ホ、ホ、ホ、と空笑ひ。大「ム、シテ又得心せぬ時
 は」定「ハテそりやもふ是非に及ばぬ、枝ぶり悪い櫻木は、切て繼木を致さねば、太宰の
 家が立ませぬ」大「ヲ、そふなくては叶ふまい。此方の勸連も、得心すれば身の出世、榮
 華を咲す此一枝、川へ流すが知らせの返答。盛りながらに流るとは吉左右。花を散して、
 枝計流るとならば、勸が絶命と思はれよ」定「いかにも、此方も此一枝、娘の命、生花を、
 散さぬ様に致しませぬ」大「ヲ、サ今一時が互ひの瀬越し、此國境は生死の境。返答の善
 悪に依て、遺恨に遺恨を重ねるか」定「サア是迄の意趣を流して、中吉野川と落合ふか」大「先
 夫迄は双方の領分」定「お捌を待てをります」と、詞崎つ親と親、山と大和路分かれても、
 替らぬ紀の路恩愛の、胸は霞に埋れし、庵の内にわかれ入。立派に云ひは放しても、定
 かに知らぬ子の心、覺束なくも呼子鳥、娘々と谷の戸に、音なふ初音雛鳥も、母の機嫌を

山と大和路云々
 大判事は山へ
 定高は大和路へ
 別れゆく

訴訟云々願を
陳べるよる機會

御氣の通るゝも
氣が利く
眞紅一辛苦にか
く

さし足に、雖「母様よふぞ。今日はお目出たふ存じます」と、武家の行義の三つ指に、堅い程猶親子の親しみ、定「テ、よふ飾が出来ました。今日は其方の顔持も、よさそふで一入目出たい。母も祝ふて献上の此花、備へたも。幾年に成ても、雛祭は嬉しい物。女子共何なりと、娘が氣に合遊びをして、随分と勇めてくれ」と、いつに勝れし後室の、機嫌は訴訟のよい出しほ。「今のをちやつと乗出して、御覽じませ」と、娘に、腰押れても兎や角と、いひそよくれのもつれ髪、定「イヤのふ雛鳥、脊たけ延た娘を、親の傍に引付て置は、結句病の種。夫で急に思案を極め、和女によい殿御を持す、嫁入さすが嬉しいか。エ、ハテ氣遣ひ仕やんな。可愛娘の一生を任す夫、和女の氣に入ぬ男を、何の母が持さふぞ。ナア、娘共」
娘「ハイ、左様でございます。お氣の通つた後室様。嫁入の先は大方今のナ、焦るゝ君でございますませふ」と、押推當ども得手勝手、誰にか縁を組紐に、胸は眞紅のふさがる箱、取出し、定「妹脊をならぶる雛の日は、嫁入の吉日、此箱の主は極まる殿御。雛の御膳で夫定め。コレ和女の夫と云ふは、誰有ふ入鹿大臣様じやわいの」
雛「エ、そんならわたしを嫁入さすとは」
定「テ、太宰の小貳が娘雛鳥、美人の聞へ敷聞に達し、入内させよと有難い勅諭」
雛「エ、イはつ」と、胸りうろくと、詞は涙ぐむ計。
定「テ、肝が潰れる筈。夫と申も畏

立て行—小腹を
立てと立て行く
にかく

多い、一天の君を聲に取家の面目。日本國に、此上のない嫁入の隨一、果報な娘。此様な目
出たい事が有物か、ナア女子共「蚊」ハイく、お目出たいと申そふか、いつそ亂騷でござり
ます」と、工合違ひの嫁入に、菊も桔梗も投首の、二人は小腹立て行。母の心も色々、咲
分の枝差出し、婿親の赦さぬ云かはし、徒は呵つて返らず。一旦思ひ初た男、いつ迄も立
通すが女の操、破りやとは云ぬが、貞女の立様が有そふな物。とつくりと能ふ思案しや。
此花は八重一重、互に不和なる親々の、心揃はぬ二つの花、一つ枝に取結び、切放すに
離されぬ悪縁の仇花。今和女の心次第で、當時入鹿大臣の深山嵐に吹散され、久我之助
は腹切ねばならぬぞや。雛鳥と縁を切て、入鹿様へ降参すれば、清舟も命を助る。知らせ
は川へ流す櫻。ちるか散ぬが身の納り。時に従ふ風に靡き、君が手生の花になれば、八
重も一重も恙なふ。九重の内に傳ると互の幸。戀しと思ふ久我之助、助けふと殺さふ
と、今の返事のたつた一つ。貞女の立様、サアく見たい」と、戀も情も辨へて、義理
の柵せきとめても、涙せき上くながら、雛「母様段々聞譯しました。お詞は背きませぬ」
定「そんなら得心して入内してたもるか」雛「アイく」定「チ、嬉しや 出かしやつた出
かしやつた、夫でこそ貞女なれ。馴ぬ雲井の宮仕へ、武家の娘と笑はれな。今日より内

はかなき―齒に
かく
淨思―憂き思ひ
重き背山云々―
是より久我之助
の話に移る

裏上臈の、髪も改めすべらかし、祝ふて母が結直してやりましよ」と、いそぐ立は立
ながら、娘の心思ひやり、別れの櫛のはかなさも、解ほどかれぬ浮思ひ。重き脊山の庵
の内、父が前に謹で、「久我之助が心底、聞し召分られ、切腹御赦免下さる事、身に取て
いか計、大慶至極」と、手をつけば、默然たる大判事、良打痺む目を開き、「今朝入鹿大臣、此
大判事を召出し、先帝寵愛の采女、身を投死たりとは偽り、其方が悴久我之助、人知ぬ
方へ落しやりしに極れば、必定、汝らが方に匿ひ有べしとの難題。元來知ぬ大判事、よ
くく思へば、采女の御難をさけん爲、猿澤の池に入水の體にもてなして、密に落し參
らせしは、中々久我之助が智恵でない、鎌足公の差圖を受ての計らひと、知たは身も今
日が始め、親にも隠し包みしは、大事を洩さぬ心の金打、若輩者には神妙の仕方、ハ
ハア出かしたりと思ふに付、邪智深き入鹿、久我之助が降參せば、命を助ん連來と、情
の詞は釣寄て、拷問にかけん謀。責殺さるゝ苦しみより、切腹さすれば采女の詮義の
根を斷大功。天下の主の御爲には、何盼の一人など葎に生る草一本、引ぬくよりも瑣細
な事と、涙一滴こほさぬは武士の表、子の可愛ない者が、凡生有者に有ふか。余り健
氣な子に恥て、親が介錯してくれる。侍の奇羅を飭、いかめしく横たへし大小、盼が首

を切刀とは、五十年來知ざりし」と、老の悔に清舟も、親の慈悲心有難涙。「命二つ有ならば、君には死て忠義を立、父には生て養育の、御恩を送り申さんに、今生の残念は一つ」と、顔を見上見下して、わつと平伏親子の誠。こなたの亭には母後室、「サア〜目出たい、和女の名の雛鳥を、其儘の内裏雛。装束の付様も、此女雛と見合せて、サアサア早ふ」と有ければ、恨めしげに打守り、雛女夫一對何時迄も、添遂るこそ雛の徳。思ふお人に引離され、何樂みの女御后。茨の絹の十二重、雛の姿も恨めし」と、取て打付椽板に、ころりと落し女雛の首、驚く母の胸板に、必死と極る娘の命、包めどせきくるはらく、涙、定、娘入内さすというたは偽り。眞此様に首切て渡すのじやはいのふ」雛「エ、そんならほんぐに貞女を立さして下さりますか。ア、忝い、有難い」と、伏拜む手を取て、定、ナウ入内せず死るのを、夫程に嬉しが、娘の心しらいでならふか。あつと受ても自害して、死る覺悟は知ながら、そなたの死る事聞たら、思ひ合た久我之助、共に自害召れふも知ぬ。せめて一人は助けたさ、一旦得心したにして、母が手づから解た髪は、下髪じやない、成敗のかき上髪、介錯の支度じやはいの。尊いも卑いも姫御前の夫といふはたつた一人。穢らはしい玉の輿、何の母も嬉しかる。祝言こそせね、

かき上髪一首を
斬るに髪が邪魔
になればかき上

悪びれず一脂せぬ事

血脉一傳統
無量品一法華經
の淨量品の誤か

心計は久我之助が 宿の妻と思ふて死にや。エ、是程に思ふ中、一日半時添しもせず。養の河原へやるかいの」と、引寄く、雛鳥も、膝に取付抱付、忝なさと嬉しさと、逢で別るよ名残の涙、一つに落る三つ瀬川。川を隔て清舟が、最期の觀念悪びれず、焼刃直なる魂の、九寸五分取直し、腹にぐつと突立る。去ヤレ暫く引廻すな、覺悟の切腹せく事は無い。コリヤ冥土の血脉、讀さしの無量品、親が讀誦する間、一生の名残、女が頬一目見てなぜ死ぬ「久イ、ヤ存も寄す。此最期に及んで、左程狼狽た未練な性根はござりませぬ去ながら、今はの際の御願ひ、私相果しと聞ば、義理に繋れ雛鳥も、俱に生害と申へし。左右時は、太宰の家も斷絶、暫の間ながら、切腹の義はお隠しなされ、降參承知致せし體に、後室方へお知せ有ば、女も得心仕り、入内致せば渠儂爲。不義の汚名は受たれ共、是ぞ色に迷はぬ潔白」去ヲ、出かした、能氣が付た。年來立ぬく武士の意地、不和な中程義理深し。命を捨るは天下の爲、助るは又家の爲。氣づかひせずと最期を清ふ、花は三吉野侍の、手本になれ」と、潔く、いへど心の亂喉、あたら櫻の若者を、ちらす惜さと不便さと、小枝にそよぐ血の涙、落ちて波間に流れ行。夫共知す悦ぶ雛鳥、「アレく、花が流るとは。嬉しや久我様のお身に恙のないしるし。私は冥土へ參じま

ハア嬉しやー是より又久我之助の話

サア〜是より又雛鳥の話を切ていの〜切て下され喃

す。千年も萬年も御無事で長生遊ばして、未來で添ふて下さんせ」と、心でいふが暇乞、「思ひ置事、云置事、もふ何にもござんせぬ。片時も早ふ、サア母様、切て〜」と、身を惜まぬ、我子の覺悟に勵され、胸を定めて取上れど、刀は鞘に鑄付ごとく、離れ兼たる血脈の継、今切殺す雛鳥を、無事としらする返事の櫻、同じく川に浮ぶれば、久ハア、嬉しや。是ぞ雛鳥が入内の知らせ、久我之助が心の安堵、采女の方の御有家は、最前申上る通り。此世に心残りなし。御苦勞ながら御介錯、雛サア〜、噺様切ていの。末練にござんす母様」と、泣ぬ顔するいぢらしさ、刀持手も大磐石。思ひは同じ大判事、子よ、りも親の四苦八苦、命もちりぐ、日もちりぐ。是ハアそふじや、早西に入口輪は、娘がお迎ひ、彌陀の來迎、西方淨土へ導き給へ、南無阿彌陀佛」と眼を閉て、思ひ切たる首諸共、わつと泣聲答る。肝に徹して大判事、刀からりと落たる障子。オヤア雛鳥が首討たか」是久我殿は腹切てか」大ハアしなしたり」と、どうど坐し、悔むも泣も一時に、鞠れて詞もなかりしが、良有て定高聲を上、「入鹿大臣へ差上る雛鳥が首、御檢使受取下され」と、呼はる聲を吹送る、風の案内に大判事、歎の姿改めて、衣紋繕ひしづく、と、おり立川邊の柳腰、娘の首をかき抱、是大判事様、わけては何にも申ませぬ。御

流れ灌頂―水邊
に壇を構へて無
縁の水死者を供
養する事
行器―食物を入
れて運ぶ器

子息の御命は、どふぞと思ふた甲斐もない、あへない有様。お前様のお心も推量致して居ます。添に添れぬ悪縁を、思ひ合たが互の因果。此方の娘も、添たいくと思ひ死、余り不便に存ます。せめて久我の助殿の息有中に、此首を其方へお渡し申すが、娘を嫁入さす心」大實尤。嫁は大和、婿は紀伊國、妹脊の山の中に落る、吉野の川の水盃、櫻のはやしの太島臺、目出たふ祝言さしませふわい」足「そんなら是迄の心もとけて」大「ハテ互に姫同士」足「エ、忝い」と悦ぶも跡の祭り、「ほんに脊たけ延た者を、いつ迄も子供に、思ふて暮すは親のならひ、あまやかした雛の道具、一人子を殺して何にせふ、跡に置程涙の種、妣共其一式、残らず川へ」流れ灌頂、未來へ送る嫁入道具、行器長持犬張子、小袖簞笥の幾棹も、命ながらへ居るならば、一世一度の送り物、五丁七丁續く程、美々敷せんと楽しみに、思ふた事は引かへて、水に成たる水葬禮、大名の子の嫁入に、乗物さへも中々に、紀念も仇の爪琴に、首取乗る弘誓の船、あなたの岸より彼岸に、流る、血汐清舟が、今般の容ばせ見る親の、口に祝言心の稱名、「千秋萬歳の千箱の玉の緒も切て、今はあへなき此死顔、生て居る中此様に、婿よ嫁よと言ならば、いか計悦ばんに、領分の遺恨より、意地に意地を立通す、其上重る入鹿の疑ひ、中直るに

も直られぬ、義理に成たが二人が不運。あれ程思ひ詰た嫁、何の入鹿に随はふ、迎も死ねばならぬ子供、一時に殺したは、未來で早ふ添してやりたさ。いひ合さねど後室にも、是迄不和な大判事を、姪と思召はこそ、駈に立て、一人の娘、チ、よくこそお手にかけてられし。過分に存る定高殿」駕ア、勿躰ない、其お禮はあちらこちら。不束な娘故、大事のお子を御切腹。器量筋目も勝れた殿御、夫に持た果報者。とはいひながら、あれ程迄、手しほにかけて育てた子を、又手に掛けて切心」大サ、推量致しておる。武士の覺悟は常ながら、まさかの時は取亂し、介錯仕後れ面目ない」駕いえく、それで目出た。い此祝言。是がほんの葬よ嫁入、一代一度の祝言に、聲殿の無紋の上下」大「首ばかりの嫁御寮に、對面せふとしはらなんだ」駕それも子供が廻れぬ壽命」大「兎にも角にも世の中の、子といふ文字に死の聲の」二人「有も定まる宿業」と、隔つる心親々の、積る思ひの山々は、とけて流れて吉野川、いとど漲るばかりなり。涙はらふて大判事、首かき上て聲高く、「駈清舟承はれ、人間最期の一念によつて、輪廻の生を引とかや。忠義に死する汝が魂魄、君父の影身に付添て、朝敵退治の勝軍を、草葉の蔭より見物せよ。今雛鳥と改めて、親がゆるして沉未來、五百生迄かはらぬ夫婦。忠臣貞女の操を立、死たる

人間最後の云々
—孟蘭盆經に
ある句

沉未來—盡未來
にて永久

ものと高聲に、閻魔の廳を名乗て通れ。南無成佛得脱」と、唱ふる聲の聞へてや、物得
いはねど合す手を、合せ兼たる此世の別れ、早日も暮て人顔も、見へず庵りの霧隠れ、埋
む娘の亡骸は、此方の山にとどまれど、首は脊山に檢使の役目、我子の介錯涙の雛よ
しや世の中憂事は、何時か當麻の大和路や、跡に妹山、先だつ脊山、恩愛義理を堰下す、
涙の川瀬三吉野の、花を見捨て出て行。

第四

引たり、ヲフ引たり、ヲツト文月七日例年の、水を新井に繰返す、釣瓶の綱も三輪の里、
酒商賣の世杉屋が、身過の水の内井戸を、わけて祝ひの賑はしき。「サア、く濟だ」と取
取に、御酒洗米備物、皆々汗を入にける。主の母は納戸より、運ぶ用意の酒肴、いつ
にないほやく機嫌、近所の衆、どなたも大義でござんした。嘉例の通酒盛して、暮
る迄ゆつくりと、遊んでいんで下さんせ。コレ土左衛門さん、年かさにお前から、酒始
て下さんせ」エア、又雑作な、止しにさんせいで。おいらが相借屋で手傳ふのも、年中
爰の井戸の水をつかふ恩返し。のふ五洲兵衛をふじやないか」五「ヲ、そふ共く、氣を

愛だてないー思慮がない

いつき呑ーいつかけ呑

氣味のよいとは云々ー氣味よいとは上への挨拶

鬼殺しーきつい酒の名

はつて貰ては術ない。是からはいつもの通、賑やかに遊びましょ。サア野平藤六、騒ごぞやく。ホンニ夫はそふと、コレ内義さん、見れば爰にも寺屋の様に、七夕様が祭つて有な」主人「サイノ、マア見て下さんせ、愛だてないと思はんしよが、こちの娘のアノお三輪、何やら星様に願が有迎、あの様に、内で祭も色々の備へ物、ませた世界じやないかいな」五「ホ、そりやマア奇特なこつちや。そして此お娘は留主かへ」主人「アイ小さい時往た寺子屋へ、七夕に呼れました。サアく、一つ呑で下さんせ。ヤイ子太郎、酌をしておらぬか。どりや吸物に豆腐でも、焚て来ましょ」と母親は、納戸に入れば打くつろぎ廻る、盃底なし共、引受く、いつき香、肴の鉢を引寄て、箸放さずの滅多喰、丁稚の子太郎、顔「ア、扱々、氣味のよいとは挨拶じや。よつ程下作な飲様じや。井戸の鮒が水香様に、口明てがつぶく。エ、夫では味が知にくかる。コレ此酒は内義様が張り込で、こちの名酒の第一番、男山といふ酒じやが、こな様達は本の無茶香。此銚子のかはりめから、もふ鬼殺しにしてくれふ。そしてマアよい加減に酒呑したら、いつもの通騒ごかい。こちのお三輪様の三味線と、太鼓も借て来て置た」「おつと合點」と、口利の土左衛門が眉に皺、「夫はそふじやが、此隣へ近比来た相借屋の烏帽子折、此井戸がへにも立

なめた奴し無禮
なまやつ

とりなりー風姿

合す、あんまりなめた奴じやないか。野平何と思やるぞ」野ソレくなまじらけた顔付
で、馬鹿慇懃な生れ付、平生ぬかず挨拶も、子細らしき切口上、毛唐人のやうな奴。大
かたソレ今時花る、早學文といふ本を見て、唐の箝め句をしをるのじや。此井戸がへに
出合ぬからは、急度物いひ付てやろ」と、借屋の内の神様達、御詫宣も取々に、夫共し
らすのつしく、歸る隣の烏帽子折、辛き世渡り甘口に、羊羹色の黒小袖、一腰指した
とりなりに、浪人とこそしられける。門口より腰かどめ、「隣家におります其原求馬でござ
ります。お屋敷方の用事に付、未明より罷出、只今歸宿仕る。後室様には、彌々御
機嫌うるはしうござりませふ。後刻緩りと御意得ませふ」と、我家へ入を惣々が、「ア、
これくく、マア待んせ。けふはコレ爰の井戸がへ、相借屋が寄て居るのに、こな様
計、來ずに居て、付合が濟のかえ。但はおいらを潰すのか」と、強請臺詞に求馬は悔り、上
り口に兩手をつき、是ははく、お顔を見れば皆合壁のお旁、是の井戸がへお手傳ひ、曾
以て私存せず。是と申も不案内から、先格の作法を存せず、段々の失禮、眞平御赦免
下され」と、聲に額すり付る。去ア、これく、又仔細らしい事いはんすかいの。ハ、
勝手を知らにやしよことがない。了簡せいなら夫で濟。此方も一番いふた跡は、モウい

いざこざ—苦情

柳さび—烏帽子
の鍔の名
いつきせき—慌
てかへる

そでにして—の
げものにして

いざこざはないわいの。此土左衛門が呑込だく「求」然らば貴下様がお執成で、个様に御教訓なされた上は、其いざこざとやら申御遺恨はござりませぬか」土「サアもふよい、云んすな。扱おいらは余程酔て居る、是からは嘉例の騒じや。調子が合いで面白ない。此石できゆつとやらんせ」求「ハ、忝ふはござりますが、私一滴も給ませぬ」土「ヤットそしたら勝手次第。サア是からが騒の趣向。此土左衛門に烏帽子屋殿、五洲兵衛に丁稚の子太郎、しめて四人の大踊、三味線太鼓は野平藤六、よいかく。求馬様も合點か」求「スリヤ私にも其踊を」子「チイノこな様は此借屋での新面、猶踊らにやならぬわい。音頭もおれが二役じや。音頭ヤア千代の始めの一踊、先は松坂こへたる、松坂こへたやつさ。踊はありやくハツハヨイヤサ。烏帽子屋殿はもじくと、手持不沙汰に揉烏帽子。ヤットサ。爰の娘の柳さび、引立烏帽子と折かけた。ヤットサ。風折烏帽子見すまして、帆懸烏帽子と歸らるよ。ヤットサ」家主もぎ兵衛いつきせき、「いかに嘉例の祝ひでも、あんまり騒ぎがかさ高な」と、門口から聲高に、音頭喚いてはいれど、いかな事、耳へも入ず、ヤットサ、ソレヤットサ。もぎ兵衛叶はず、ともぐくに、呵る詞も拍子つき、「ヤットサ。此家主をそでにして、酒を呑共云わばこそ、ヤットサ。儕等計呑喰ひ、近所を構はぬ大騒ぎ。ヤ

とはんいぼんや

酒買が云々酒
買と盗人と取違
へていふ

ツトサ。是程いふても聞入にや、家明付るが合點か「エ、サテサテ合點じや。是を來て見よかしのへ、お家主渡した」と、踊拍子の醉機嫌、夢中に成て立歸る。家主跡にとほん

と成、「ア、やくたいもないやつら、とうくおれ迄夢中にした。婆様内にか、逢たい」と、いふ聲聞て納戸より、「サ、是はマアお家主様か。ヤイ子太郎め、あなたがお出なされたら、何故おれに知らせおらぬ」子「ナアニ云わんすやら、あのお家主様も、いんま迄同じ様に踊つてど有た物」婆「又つけくと何云おる。サアく申、なんぞ御用でござりまするか」も「サ、用共く大事の用。去お侍から頼れたが、入鹿様の云付で、ソレ鎌足といふ和郎の息子の淡海、方々流浪して居るけな、夫を見付出したら大金、何でもマア此方へござれ、とつくりといふて聞そ。サアちやつとくくく」婆「ハイくくく、そしたらお前へ参りましょ。ヤイくくく子太郎よ、サア闇がしう成て來た。もふ日が暮たそふな、火も消して見世明い。用心に氣を付い。又此娘は寺屋から戻りが遅い。ソレ酒買が來たら擲出せ、盗人が來たら酒はかつてやりおれ」と、氣の急ぐ儘に間違ひだらけ、打連てこそ出て行。日と俱に營む様も入相の、四方の市庫戸鎖し時、子太郎跡を打見やり、灯を上、表の戸、夜の構のそこ爰と、こなたの道より歩よる、振の袖の香やごとな

き、面を隠す絹かづき、誰白絹の優姿、窺ふ内に隣の軒、知らせのしはぶき主の求馬、「今宵はどふして早かりし。サア、此方へ」と其跡は、いはず語らず手を取て、戸口立寄入跡に、子太郎は不審顔、隣の門口耳をあて、聞濟して立戻り、子「なんでも隣の烏帽子奴は、おれとは違ふて、よつ程えらい色事仕じやわい。彼奴が見事な烏帽子で、アノ代物占めおると聞へた。こちらのお娘に聞せたら、大抵の事じや有まい。エ、はし早い奴では有」と、咥く所へ娘のお三輪、寺子屋戻り足早に、門口這入れば、子「やお三輪様戻らんしたか。サア、事じや、く、く、大事じや、く、く」子「チ、彼人はいの、何じやいの。私に悔りさしやつたわいの」子「さしやつたわいの、さしやつたわいの所がいの。コレお前に忠義をいふて聞す」子「忠義とは何の事じやいの」子「エ、忠義とは忠臣の事じやわいの」子「サ其忠臣は知て居るがの。夫がどふぞしたかや」子「サ其忠臣はの、アノ隣の烏帽子奴がな」子「隣の烏帽子とは、ム、求馬様の事かいの」子「チ、求馬々々、其求馬の姿からおこつた事。こちらの内儀様は、家主殿へ用が有て、いかしやつた其跡へ、何じやかしらぬが、眞白な絹をかづき、幽霊かと思ふたら美しいけん妻が、隣の門口ことくと叩いた。そしたら求馬様ががうつと出て、よう早う來たナア、と手に手を取て内へはいつた。

けん妻—女房を
黒つてらふ詞

つきはなく手
持無沙汰

夫からおれがじつとして聞いて居たら、ソレこちへ雇ふ男共が、朝の間に酒桶洗ふ様に、シ
イ／＼といふ音がした。どふでもありや求馬様が竹籠でこすると見へるわいな。ナント
お三輪様、コリヤだまつて居られまいがナ」みわ、ム、そんなら何といやる求馬様の所へ、
美しい女中様が見へて、其女中様を連立て、はいらしやんしたと云やるのか「子「アイ」
みわ「そりやマア合點のいかぬ事。幸かよ様も留守なれば、其方往て求馬様を、爰へ連て戻
つてたも」子「チツト合點。香込だ」と、走り出て隣の門、破る計に打たとき、子「ゴレ求馬
様、隣の酒屋から使に來た。今のが濟だら印判持てござんせ」と、口から出次第、求馬は
悔り、「何やらん」と立出れば、物をもいわず、子「マア／＼此方へ」と無理やりに、手を
引連て我家の内、夫と見るより娘のお三輪、口にはねど赤らむ顔「求馬様お歸りなされ
たか」求亦是は／＼お三輪様、寺屋へお出なされたけな」と、互に味な墨付を、子太郎が
ひつ取て、「サアおれが役はもふ是迄。そこへ何かの立引させ。爰りて我ら粹を通し、夜
食の扶持に有つかふ。兩人共後に逢ふ」と、納戸へ走入にける。跡に二人はつきほなく、お
ほ子育の娘氣に、思ひ詰たる一筋を、いわふとすれば胸せまり、みお「今子太郎に聞たれ
ば、美しい女中様が、宵からお前へ來てじやけな。定めてそれは隠し妻、是迄お前とわたし

和歌三神一住吉
社、玉津島社、
坊水入燈

乞巧針—女の手
工の巧ならん事
を七夕の星に願
ふ、其儀式を乞
巧奠といふ

が中、逢事さへもたま〜に、千年も萬年も、かはらぬ契りとおつしやつた、その約束は偽りか。浮世の譯も辨へぬ、在所育ちのわたしでも、いひかはした事忘れはせぬ。あんまりむごい」と取付て、涙先き立つ恨言。求「是は思ひも寄ぬ疑ひ、成程女中は來て居るが、あれはソレ春日の神子殿、其連合の禰宜殿の、烏帽子を誂に見へたのじや。美女はおるか、いかな天女が影向有ても、外へ散る心はない。和歌三神を誓にかけ、いつはりは申さぬ」と、時の間に合落付せば、さすがおほ子の解やすく、みち「神様迄誓言に。夫でわたしも落付た。必變つて下さんすな」と、立上つて七夕に、供へ祭りし二つの小手巻、持出て前に置、「わたしが寺屋へ往た時に、お師匠様に聞て置た。殿御の心の變らぬ様に、星様を祈るには、白い糸赤い糸、小手巻に針を付、結び合せて祭るとやら」求「ア、夫が、則、願ひの糸の乞巧針」みち「ム、お前も能ふ知てじやナア。白い糸は殿御と定め、女子の方は赤い糸。それでわたしも此願籠、寺屋で見た本の中に、心をかけし女の歌、ア、何とやら、ヲ、それよ。戀渡る思ひは千々に結ほれて、幾夜願ひの糸の小手巻」求「ホ、其男の返しには、逢見ての後も願ひの糸筋を、よそへ亂すな君が小手巻」みち「アイ〜そふでござんした。いつ迄もかはらぬし、赤い糸をお前に渡し、白い糸を私が持ち」契りもな

うぢつく一隣隣
ナホ
ひつこなすーさ
げしむ
はしたないー不
儀

がき願ひの糸、夫婦の約束星合に、鵲ならぬ小手巻を、千代の媒取かはし、肌に付合ふ
わりなきるにし。求馬が内より以前の女、歩み出てこなたの門口、橋隣の烏帽子折様は、
こなたへ来てござるかな。赦さつしやれ」と内へ入、姿に求馬は手持不沙汰。お三輪は何
の氣も付ず、
「おア、彼方が今のお人かへ」
「求」
「タイノ、あれく、神子様じや。それで薄
衣著てござる。ナア申、お前様は、アノお連合様の、烏帽子を誂にお出なされましたの
じやナア。そうでござりませふがな。サ、
、そふでござります」と粉らかす、包む詞
の絹を漏る、月の笑顔をぴんとすね、
「橋」
「コレ申、求馬様、アノ女中はお下婢か何人でござ
ります」
「求」
「アイヤ是は此酒屋の娘御」
「橋」
「ム、其マア隣の娘御と、最前から久しい間、何
の用がござりました」と、問れて求馬は答へもなく、
うぢつく素振見て取お三輪、「ア、
申、コレ神子様とやらいふ女中様。人をマアお下婢かの何のと、ひつこなした物の云様、
求馬様にはアイ、わたしが用がたあんとござんす。お前のお世話には成まいし、構ふて下
さんすな」
「橋」
「テ、是ははしたない。其様に云はしやつても、そもじなどの用を聞、求馬様
じやないわいのふ。サアお歸り」と手を取ば、
お三輪が隔てて、「イエくく、わたし
がまだ用が有、往なす事は成ませぬ」
「橋」
「イ、ヤ爰には置はせぬ。邪魔せずとそこ通しや」

と、手を引立立出れば、「イヤ放さじ」とお三輪もまた、あなたへ引ばこなたへ引、譯も
 渚に戯れる雁、翅振袖ふり分け姿、戀を諍ふ其折から、いきせき戻るこの家の母、「ヤ
 ア求馬殿、こな様には用が有。何處へも遣る事ならぬ、動くまいぞ」と身構へに、何かは
 知らず白絹の、姫は外へと出行くを、とめる求馬に又すがる、娘を押分け母親は、「求馬
 やらじ」と引とどめ、繋ぐ手と手を、柵の、風に揉る、争ひに、子太郎立出見まほして、こ
 れ幸と母親の、帯に慥り括つたる、繩先を樋の香口に、結付納戸へ遊て入。此方に互ひ
 に戀慕ひ、姿亂るゝ姫百合の、手を振りきれば一時に、亂れて走るを母親が、遣らじと
 追ば繋ぎ繩、りきむ拍子に香口抜け、酒は瀧津瀬悔りはいもう、三人門へ遅れじと、同
 じ思ひを跡や先、道をしたふて、三重

道行戀のおだまき

表具 岩戸隠れし神様は、誰と寝して常闇の、夜々毎に通ひては、又歸るさの道もせ氣も
 せ、夫も何故戀故に、簀ると所體恥しと、佛隠す薄衣に、包めど香り橘姫、思はぬ人
 を思ひ佗、心のたけをくどけ共、つれなき松の下紅葉、焦れて絶ん玉の緒も、殿故なら
 ば捨草も、暫しはいこふ芝村の、賤の男が、歌置手拭で、忍びくの出逢妻、晩にござら

連理—比翼連理
と連理の枝

ほその—細しと
細野

布留—降るにか

時—共照
おもはゆ振—恥
かしき素振
袖几帳—袖にて
顔かくす
節成—切なる
恥かしのもり—
羽師の森にかく

ば、ナコレのんやほんにさ、背門の柿の木の、枝こへて、連理をちぎる言の葉は、それ
も戀中爰はまた、箸中村よ一森の、長者が跡と名にひどく、釜が口をも出離れて、歩む
に暗き吳竹の、茂れる中を、冷泉分行けば、葉毎の露がほろくくと、ほろよ打なる雉子の
聲、思ひ比べていと猶、心ほそのに立つくす、憎や、案山子に感さるよ、われが姿に
又怯ぢて、はつと立行羽風につれて、ちりくちるや柳本、流るよ水に裾ぬれて、物思
へとや帯とけの、里義し自は、終に一度の情さへ、ないて身を知る涙雨、夕、布留の
社の御燈の影か、松の木の間にちらくくと、見へつ隠れつ歸るきの、跡を求馬が慕
ひ來て、互にはたと行合の、星の光に顔と顔。鱈ヤア戀人か何故に、爰迄跡を追馬は、も
しや塙の契をも、かなへてやろとのお心か」と、胸にはいへど詞には、おもはゆ振の袖
几帳。求成程節成心ざし、仇に思はじ去ながら、左程こがるよ戀路にて、晝をば何と鳥
羽玉の、夜計なる通ひ路は、いとふしんなり名所を、聞たる上はこなたより、二世の堅
めは願ふ事、明させ給へ」と只管に、とはれて、鱈實にも恥しの、もりてあまれる浮身
の上、語るにつらき葛城の、峰の白雲有ぞ共、さだかならざる賤の女と、思ふて深い疑
ひの、雲をはらして、自が、思ひもはらして給はらば、どんな仰も背くまい。譬草葉の露

垂乳根—父母

色は似たり—似たりや—杜若の露を取る
御しゆてん—御殿女中
奈良坂や云々—奈良坂やこの手柏の二面とにもかくにもねぢひ人の友(萬葉集)三笠—見ゆるにか

霜と、消ても何の厭やせぬ。是程思ふに胸欲な、とけぬお前のお心は、あんまり結ぶの神様を、祈過した咎かや。つれなの君や」と恨わび、思ひ亂るゝ薄かけ。夫とお三輪は走り寄、中を隔てて立柳、立退袂引とどめ、「エ、聞へませぬ求馬様。ソリヤ氣の多い悪性な。そもや二人が馴初は、始て三輪の過し夜に、葉越の月の、佛は、お公家様やら、侍様やら、知れぬなりふりすつきりと、水際の立好い男、外の女子は禁制と、しめてかためし肌と肌。主有人をば大膽な、斷なしに惚るとは、どんな本にもありやせまい。女庭訓躰方。よふ見やしやんせ。エたしなみなされ女中様」橋「イヤそもじとて垂乳根の、ゆるせし中でもないからは、戀は仕勝よ我殿御」みわ「イ、ヤわたしが」橋「イヤわしが」と、俱にすがりつ手を取て、三人歌園に色よく咲草時は、男女になぞらへ云はど、云れふ物か夕顔の、梅は武士、櫻は公家よ、山吹は傾城、杜若は女房よ。色は似たりや菖蒲か妾、牡丹は奥方よ、桐は御しゆでん、姫百合は娘盛と撫子の、ナルゾエく、なるとならずと奈良坂や、此手柏の二人の女、睨めば睨む萩と萩、中にもまるゝ男郎花、放ちはやらじと縋り付、こなたが引ば、あなたがとどめ、戀の柵薦蔓、付まとはれてくるくく、廻るや三つの小車の、花より白む横雲の、たなびき渡り有々と、三笠の山も程近く、鳴

梁ゆる云々―是
より話が入鹿の
御殿に移れり

若草山葛籠山―
三笠山に同じ

うちやさん―賣
ト者にかく

鐘の音に驚く姫、歸る所は何國ぞと、求馬が氣轉振袖の、はしにぬふてふ取かはす、縁の緒環いとしさの、あまりて三輪も悋氣の針、男の裾に付る共、しらす印の糸筋を、したひ慕ふて、三重榮る花も時し有ば、すがり嵐の有ぞとは、いさ白雲の御座、新に造る玉殿は、彼唐國の阿房殿、爰に移して三笠山、月も入鹿が威光には、覆はれますぞ是非なけれ。腋門の方より宮越立蕃、荒卷彌藤次、御前よき儘高ふ吹、帆かけ烏帽子も十分に、仰り返り入來り、舞、ホウ仕丁共朝清な。イヤなに立蕃殿、此度新に築かれたる此山御殿、朝日にかざやく所は、吉野龍田の花紅葉、一度に見る共及びますまい」玄「ナニサナニサ、イヤモ言語に述がたき御物好。瑪瑙の梁、珊瑚の柱、水晶の御簾瑠璃の障子。コレ見られよ、飛石は琥珀、砂は金銀、又釣殿に登り見おるせば、春日の杉も前栽の草びら、若草山、葛籠山は撒石同然、猿澤の池は、お庭の井戸に見へまする」と、咄の尾に付く仕丁共、「ア、結構な御普請でござります。そふして何やらふつくくと、能匂ひが段します」ナ「ヲ、其筈、椽板、檻に至る迄、皆伽羅と沉」牛シタリ抹香や鉤屑とは違ふた物じや。のふ又次」又「サイ、又お學問所は唐を寫して唐木じやけなの」牛「ハアン其唐木とは何々ぞ」又「ヲ、先花輪」「フン紫檀」「フン黒檀」「ホイ鐵刀木」「ホイうらやさん」

くずな—ふぢなの辯のもじり

鳥甲—衆人の被る物、とるにか

縹緗—油のへりの模様

「ホイ當卦本卦」「ヤ手の筋」「ヤ男女相性」「ヤ墨色の考」「コレ〜失物待人」「コレコレ〜書判の善悪」「ア、コレ〜、そりや山御殿ではなふて、山伏じやぞや」「サア王様も此山でねやしゆるによつて山伏じや」「エ、人を嘲哂するかな」「イヤ長老とは坊主の事か」「イ、ヤ女子の事じや」「そりや女郎じや」「イヤ如露とは花に水かける物じや」「エ、どふ云やこふいふと、なんほ貴様がくずなの辯でも、おれにや叶はぬ」「ヤイふるなの辯じや、くずなとは魚じやはやい」「イヤくずなじや」「イヤ〜ふるなじや」「くずなじや」「ふるなじや〜」「玄ヤイ〜騒しいそりや何事。清め仕廻はど早く下れ。皆行々」と追立てやり、「アレお聞有彌藤次殿。我君此殿へ御移りと見へ、物の音近く聞へ申」種「いか様左様」と威儀つくるひ、嚴重にこそ扣へ居る。花にくらし月に明し、酒池の遊びに酔つかれ、御殿々々の通ひ路も、數多の官女が道樂に、君の機嫌を鳥甲調ふる笛や、簫篳篥、太鼓の音も鶏徳に、己が不徳を押登る、縹緗の深縁、蜀錦の褥の上、むんづと座せし有様は、實類なき榮華の殿。立蕃彌藤次頭をさけ、種「先達て卿上雲客達より、君の壽を祝し申されし數の鳥臺、ソレ女中方、叙覽に備へられよ」女中「アツ」下答て持出る、思ひ〜の飭物、何かな君が壽を、祝ふ鶴龜松竹の、崧は千尋の深縁、松と鶴龜合

天上人―殿上人
入鹿―入るにか

追蹤―追従

賀樂―歡樂
とつてう聲―と
んきやう聲

せて見れば、一萬二千の齡を君に、譲り壽く蓬萊山。扱又次の島臺は、周の帝の妾、
假の情の弟草、實寵愛の色菊や、葉毎を染し其筆の、命毛長き八百歳、老せぬや、
藥の名をも菊の酒、酌め共盡ぬ泉の壺、「天上人の方々より、御祝儀なり」と相述ぶる。
一入興に入鹿が悦び、「ヲ、百司百官より、下萬民に至る迄、我在位長かれと願ふ事、名
名が身の冥加なれば、猶萬歳を唱へよ」と、高慢我慢の詔。はつと兩人階下に平伏、
我は申に及ばず民百姓も、野に手を打て舞樂しむ「彌誠に戸ざさぬ御代と申は、今此
時に候」と、滅多に追蹤猩々の、人形に見惚れ官女達、甲コレ、此猩々が手に持た、
酌盃も取はづし、壺には誠の造酒を湛へて、是で御酒宴始めふか」乙「いか様それは能御
慰み、サア、早ふ」と取々に、手まづ遮る盃の、廻れやく萬代も、盡きじ盡きせ
ぬ寛樂の、興を催す三重其所へ、「物もふ頼みませう」と、とつてう聲、撥鬢頭の大男、御
殿間近くほつかくくく、著たる木綿の長上下、糊しやきばつて立跨がり、「エ、入
鹿殿は爰じやな。内になら逢して下んせ」と、木で鼻こくるむくつけ詞、宮越、荒卷、目
に角立、「ヤア何奴なれば、君の御前共憚らぬ馬鹿者め。退去りおらふ」ときめ付る。「イ
ヤおりや、灘波の浦のふか七といふ網引でござんすが、何時やらから此方の方へ、宿替し

鎌きり云々―鎌
足の大匠のなま
り
首陽山―伯舅叔
齊の籠りし山
普天の云々―普
天之下莫非王土
率土之濱莫非王
臣(詩經)

こなん―も前さ
ん
くれてる―くれ
というて

きす―酒

まはすは―氣を
まはすは

てごんしたお公家殿、鎌きりの大身から、雇はれて来た使で「ごんす」と、いふを遙に見お
ろす入鹿、「ハテ心得ぬ。其鎌足めは首陽山の昔を學び、跡を隠せしと聞しに、扱は難波
の浦に有けるよな。普天の下、率土の濱、王地にあらざる所なければ、今日迄飢にも臨
まず、健固におりしは我恵ならずや。夫を思はゞ疾にも参り、恩を謝すべきの所、使を立
しは緩意なり」フカ「エ、夫、おれが知た事かいの。斯う見た所が、餘つ程短氣者じやわ
いの。併、喧嘩はこなんの様にこつきで行のが徳じや。鎌殿も一旦は言かよつて、てつば
つて見よふと思はれたそふなが叶はぬやら、どぶぞおれに往て挨拶してくれてよ、夫は
夫はきつい弱りのい。大概な事なら、最ふ了簡してやらんせ。懇な中は得て心安立て、
間違が有物じやてのふ。コレ中直りの印じやてよ、きす一升おこされた」と、刀の提緒に
ぶらくと、結びし徳利急度目を付、ス「いまだ日本へ渡らぬ兵器、唐土に有と聞飛道具
の類成か。何にもせよ、怪しき物を所持せしぞよ。旁々油斷致すな」と、眉を顰て身構へ
たり。「エ、とつけもない。とつくりと見やんせ。酒じやく。コレ其處なお手代衆、早
ふコレ、夫進ぜさんせ」エ「イ、ヤ善悪しれざる鎌足より差上し酒ならば、毒藥仕込あら
んもしれず。奉る事罷ならぬ」フカ「エ、まはすはく。どれおれが毒味してやる。茶碗

ひよんなーとん
てもない

東方朔—漢武帝
に仕へて寵あり
西王母の桃を盗
みて食ひ授命せ
しといひ傳ふ

はないかへ。そんなら赦さんせ、直やりじや」と、云つゝ徳利の口から口、「チ、よい酒じやになあ。是を呑ぬといふ事が有かしらぬ」と、振つて見て、「ヤア〜南無三、皆飲でしもた。エ、ひよんな事してのけた。ヤコレひよつと鎌殿に逢んしよと儘、おれが呑だといは云ずに、よふ届いたと禮いふて下んせや」と、我武者な様でも正直者、眞面目に成て氣の毒顔。「ア、まだ何やら言傳つて來たが、落しはせぬか」と、懐探し、「ヲット有は、サア是見やんせ」と一通を渡せば、彌藤次押披き、「ナニ〜我不肖たるによつて、暫く心を惑はすといへ共、今一天四海、御手の内に落入事、正しく天の譲り給ふ萬乗の御位。入鹿公に背くは、天に背くに同じと、先非を悔て、爰に降參を乞者なり。今より臣下に屬するの印、君の齡を東方朔にたとへ、此桃花酒を以て御壽を祝し奉る。内大臣藤原の鎌足、謹で申」と讀上る。ス「ハ、ハ、ハ、ハ、なまくら者の鎌足め、臣下とならんなどとは、イヤしら〜しき偽り奴」フカ「何じや、鎌殿を嘘つきとは、何ぞ慥な證據がごんすか」ス「ヤア小ざかしき證據呼はり。彼が心腹いふて聞そふ」フカ「ドレ聞ませうか」ス「先此入鹿を、東方朔に譬たるが野心の證據」フカ「そりや又なじよに」ス「チ、昔漢の武帝が代に、東方朔といへる奴、三千年に一度實を作る桃を、三度盗で喰ひし故、九千年の齡を有

手を入しー手に
入しか

なまけーふざけ

知た同士云々
謎にて互に心の
合うた友は心地
よしと也

つ。桃に百の縁をかたどり、百敷百官を手を入し入鹿を、盗人なりといわぬ計の底工。憎
くい奴」と居尺高。フカ「イヤ〜、そりや無理じゃ〜」ス「ヤア〜、蛆虫め、何を知て小癩
奴」フカ「イヤ何にも知らんけど、代りに成て来たおれじやによつて、一番いふのじや」ス
「チ、鎌足が代りならば、是をも代りに試みよ」と、傍なる島臺追取て、眉間へはつしと打
付る。臺は微塵に飛散れど、恟共動かず、フカ「ア、よい加減にだよけさしやれ。其厄拂ひ
の代物、東方さつとやりに譬たといふて、業わかすのか。年にあやからんせとこそ書てお
こさしやつたれ、盗人と書ちやないぞや。それに其方から、色々な講釋を付て盗人穿鑿。知
た同士はずどしいとやらで、盗人の覺へが有かして今の投打。ア、こなんは正直な人さん
じや、と世間の噂。見ると聞とで大きな違ひ。マアそんな盗人と鎌どんを、懇にはおれが
さすまいわいの。仁體にも似合ぬ事さんすの。よもや左様じや有まいかの。但覺へがごん
すか。イヤ左様かいの」と、文盲だらけも理屈は理屈、「如何でござはる」と、やり込れば、邪
智の入鹿苦笑ひ、「ハテ口がこしく言曲しな。ういやつ出かした。其褒美には鎌足が實否
を正す迄、おれは人質、最早籠中の鳥同然、歸る事はならぬと思へ。ヤア〜、玄蕃、彌藤次、
いざ萩殿にて天盃を廻らさん。來れやつ」と引連て、帳臺深く入にけり。フカ「ア、コレコ

と違―婦人達

つくつく―衝き
にかく

けふな―希有に
て一種かはつた

文七八藏―役者
の名

レおれを質に取しやると、著物や道具と違ふて、代物が飯喰ふぞや。併あゝの業腹では、大抵で喰しおるまい。ヲ、空腹に今の酒でよつ程酔が来たわい。ドリヤ何處でなと、一寐入りやつてこまそ」と伸上り、「エ、腰が重い筈よ此大小、らつしもない物さよしておこして、あた面倒な」と椽板へ、ぐわたりと鳴は相圖かと、突出す鎗は篠薄、構はず轉り臂枕、不敵なりける男なり。御所より外へ咲出ぬ、若きご達が入かはり、男見に来る愛想には、お茶よお菓子よ烟草盆、銚子土器持て出、官女「コレそな人は何御用で、お召寄ありはしらねど、嘸待久しう氣もつきやう。九獻一つ」とさし置ば、體寐返り腹這に、頬杖つくつく、打眺め、ツカ「フン貴様達は誰じや」官女「ヲ、我々は上様の、身近く召ると女共」ツカ「何じや、短い女子じや、ドレく。成程どれも是も能煮込だ者じや。わいらは爰な食焚じやな、テモけふな前垂してゐるな」官女「エ、つがもないざればみ事。わしらを問やる其方の名は」ツカ「ヲ、鱧」官女「何鱧とは」ツカ「ハテ商質の夜網にりや、沖でも磯でも行當りに、よふ寐る故に、鱧七といふ漁師々々」官女「ヤア料紙とは、何ぞ書てたもるのか。夫ならば、必繪や歌はいやじやぞや。今難波津で持囃す、歌舞伎芝居の其中でも、よう聞及んだ文七や八藏の紋ならば、書て欲い」としどもなき。櫻の局摺り寄

て、「そふして下々は、皆其方の様な男かや。能男もたんと有である。地下の女子は羨し

い、芝居は見次第、能男は持次第。ほんに又此御所女には何が成。見るも見るも冠装

束窮屈で、急な逢瀬の其場でも、衣紋の紐よ上帯よ、解かほどくか大抵では、下紐迄は

手がとどかず、つる其内には花に風、月に叢雲さはりが出来て、本意ない別れをするわ

いの」と、いふさへ顔に紅葉の局、「中將や少將あたりで戀すれば、あのおひかけが邪魔

に成、尻目づかひは出来ぬく」櫻局「其上格氣いさかひも、こつちからは檜扇で、擲け

ばあつちは笏でとめ、つとぱりかへつていきつた計、いらふても見ぬ逆鉾の、雫情も受

て見ず、しんきくで暮そより、いつその事に玉の緒も、たえなばたえたがましである。

もしもや誘ふ水しもあらば、往にたいわいの」と鱧七に、ひしと二人は抱き付。悔りは

いまう業にやし、フカ「エ、けたいなけん妻奴等、あつちへきりくうせあがれ」と、權

もほろよに云ちらされ、官女「さつてもすけなない戀しらす、玉の盃底ぬけ男、不骨者よ」

と不興して、本意なく奥へ入にけり。四邊見廻し長柄の酒、庭の千草にざらくくと、灌

ぎかくれば忽に、葉立變じて枯萎む。フカ「ハ、フ、フ、フ、フ、最前の鑓といひ、又候

や此毒酒。ハレヤレきつい用心」と、猶打見やる庭先へ、弓と矢つがひ、はらくくと、

紅葉の局一赤く
するにかく
あひかけ一縁
玉の緒云々一玉
の緒上絶えなば
たえね云々の歌
をとる
誘ふ水云々一小
野小町の誘ふ水
あらばいなんと
ぞ思ふの歌をと
る
はいまう一閉口
玉の盃云々一色
好まざらん男は
いとさうくし
く玉の厄當なき
心地云々（徒然
草）

さはるかいな
觸るゝが最期
ぬた一肉を酢
増であへる
矢稜一矢を射か
くる用意と稜と
かく

お拾ひ—もある
小打著—葵東の
下に著る服
さゝがに—蜘蛛
の枕言

滅多—むしやう

追取かこませ宮越立藩、「いかにしても心得ぬ頼魂。尋問べき子細の有ば、引立來よとの論言成ぞ、早々參れ」ラカ「ヲ呼にごんせいでも行のじや。假初にもびこくと、ちよつとでもさはるがいな、腰骨踏折り、疝氣の虫と生別れさずぞ。ヤコレ家來共さん、わり様達も、其鳥威し放すが最期、取擱まへて首引拔、かたはしからぬたにするぞ。ヤどりやおれから先へ行やんしよ」と、事共思はぬ大膽者、胸の強弓矢襖を、引明てこそ入にける。半太夫されば戀する身ぞつらや、出るも入も忍ぶ草、露踏分て橘姫、すぐく歸る對の屋の、障子にばらり打礫。官女、ソリヤお歸りのしらせぞ」と、めいゝ庭に集ひ下り、枝折開いて入參らせ、「おいとしやく、御所のお庭の内さへも、ついにお拾ひなされぬに、戀なればこそ徒歩跳、晝朝露でお裾もぬれん。小打著に召せかへん」と立寄て、「ヤアお振袖に付て有、此紅の糸不審」と、手繰たぐればくるくと、糸に寄身はさよがにの、雲井の庭へ引れ來る、主は床しの、橘ヤア求馬様か、ハアはつ」と驚く姫よりも、騒ぎさどめく局達、「扱も見事引寄た。七年物の戀人様か、能うこそお入遊はした。サアく此方へ」と手を取れば、求、イヤ手前はつい道通り、此緒環を拾ひ上るやいな、滅多に引れ參つた者。何にも存せぬお赦し」と、出る向ふを立塞ぎ、官女「エ、手の悪いなさ

れ様。わたしらに御遠慮は、内々のお咄しなら、どりやお次へ」と立て行。姫はとかうの詞なく、差俯向いて思案の求馬、求「フン此御所の姫と有ば、聞に及ばず入鹿の妹橘殿」と、云れてはつと胸せまり、橘入鹿が妹と知り給はど、よもお情は有まいと、隠し包し甲斐もなふ、御存有しお前こそ、藤原の淡海様」と、いふ口ちやくと袂に覆ひ、求「女なれど敵方に、我名を知れば一大事。不便なれ共助け難し」橘成程お道理御尤。生て居る程思ひの種、お手にかよるがせめての本望。かういふ内もお姿や、お顔を見れば輪廻が残る。サアく殺して下さんせ」と、刃を待たる覺悟の合掌。淡「心底見えた。ガ誠夫婦と成たくば、一つの功を立られよ」橘一つの功を立よとはへ」淡「チ、入鹿が盗み取たるこそ、三種の神器の其一つ、十握の御剣奪返して渡されなば、望の通二世の契約。得心なければ叶はぬ縁」橘「チア是非もなや、悪人にもせよ兄上の、目を掠るは恩しらず。とあつてお望叶へねば、夫婦と思ふ義理立す。恩にも戀はかへられず、戀にも恩は捨られぬ、二つの道にからまれし、此身はいか成報ひぞ」と、忍び歎ておはせしが、「チ、左様じや、親にもせよ兄にもせよ、我戀人の爲といひ、第一は天子の爲。命に掛けて仕課せませう」淡「チ、出かされたり。シテ又知らせの相圖は何と」橘「今宵御遊の舞に事寄、寶劍

どん未來―盡未來にて永久

も清所―貴人の膳部を取扱ひし所

奪うばひお渡し申まうさん。笛ふえや鼓つづみの音ねをしるべ、奥おくの亭てい迄いたお忍しのび有あれ」淡し然しからば我われは此この所ところに、暮くるをしまばし待まち合あいさん、必かならず首し尾ゆびよふ」橋はし合あい点てんでござんす。ガ若もし見み付つけられ殺ころされたら、是こゝが此この世よのお顔かほの見み納なめ、例たとへ死しんでも夫ふう婦ふじやと、おつしやつて下くださりませ」淡し」チ、運うん命めい拙ちく事こと顯あらはれ、其その場ばで空からしく成なる迎むかへ、ぢん未來みらい際さいかはらぬ夫ふう婦ふ」橋はし」エ、忝かたじけない嬉うれしや」と、抱かきしめたる鴛う鴦ぎやうの、つがひし詞ことば縁えんの綱つな、引ひわかれてぞ忍しのばるゝ。迷まよひはぐれしかた鶉う草くさの靡なびをしるべにて、いきせきお三さん輪りんは走はり入いり、みわ「エ、此この緒いと環たまの糸いとめが、切きくさつた計はつかりで、道みちからとんと見み失あふなふた。さりながら、爰こゝより外ほかに家いえはなし、大おほ方かた此この内うちへはいつたに違ちがひはない。エ、誰たれぞ來こよかし問とたや」と、見み遣やる先さきよりお下した婢めかけが、被か眉まゆ深ふかにしやなくと、豆まめ腐ふ箱せき提きけ歩あゆ來くる。みわ「申まう々々」と呼よべければ、ヲツト吞の込み早はや合あい点てん、下くだ婢めかけ」チ、お清きよ所ところ尋たづねのなら、其その處ところをこちらへ斯かう廻まつて、そつちやの方かたをあちらへ取とり、あちらの方かたをそちらへ取とり、右みぎの方かたへ入はいつて、左ひだりの方かたを真ま直ただに、脇わき目めもふらず滅めつ多たやたらにすつと行ゆきや」みわ「イエ〜私わたしが尋たづねのは、お清きよ殿どのとやらではござんせぬ。年としの頃ころは廿に三さん四しで、色いろ白しろにくつきりとした、好よい男おとこは参まゐりませなんだかへ」下くだ婢めかけ」チ、く〜〜來きたけなく。夫それはお姫ひめ様さまの戀こひ男おとこじやけなの。三さん輪りんの里さとから跡あと追おうて來きた所ところを、何なにかお局つぼ達たちが引ひ捕とり、有あり無なをいはず御ご寢しん所じよへ、

いけなり―羨まし

いしころしい―
瘤にさほる

あた滅相な―あ
たは照聲

ぐつと押込、上から蒲團をかぶせかけ、ア、く宵の中内證の御祝言が有筈と、暮ぬ内から騒でじや。エ、けなり、こちと迄、内太股がぶきくと、卯月あたりの弾け豆腐の御用が急ぐに」と、しやべり廻つて出て行。みわ「サアくひよんな事が出来て来た。ほんにく、油断も透も成こつちやない。大それた人の男を盗くさつて、何じやいしこらしい、内祝言じや。余りな踏付けやう。よいく、其代り何處に居よふと尋出し、求馬様と手を引て、是見よがしにいで退るが腹いせじや」と、行んとせしが、「イヤくはしたない者じやと、ひよつと愛想を盡されたら。と云て此儘に、見捨て是が如何往れふ。エ、如何せうぞ」と心も空、登る階長廊下、行こふ女中見咎て、一人が留れば二人立、三人四人いつの間に、友呼千鳥むらくくと、爰かしこから寄たかり、女中「ついし見馴ぬ女子じやが、其方はマア誰じや、何者じや」みわ「ハイく、イヤ私は内方の、ヲ、夫よ、さつきのお清殿は寺友達、奉公に出られてから、久しう逢ぬなつかしさ、ちよつと見舞に寄ましたら、是はマアくよう来た、上れ茶々香、そふして烟草吞。アノお上にはあた滅相な、御祝言が有と、聞ば聞程涙かこほれて、あたお目度い事じやけな。ほんに内方の様な能衆の御祝言は、どの様な物じや、己やれ、拜んでなりと腹いよと、浮々爰迄

紫のゆかり一紫
の一本ゆるに武
藏野の草は皆が
らあはれとぞ見
る (伊勢物語)

はんなりと一お
手柔かに

参りました。何卒お前方のお心で、聲様をちよつと拜まして貰ふたら、忝ふござります。参る」といふ顔も、恨み色成紫の、ゆかりの女と早悟り、弄つてやると、目引袖引、甲、マア、其方は仕合な。斯ういふ折に参り合、お座敷拜むといふ事は、女の身では手柄者、したが此方等が呑込で、お座敷へは出す物の、何ぞさよずば成まいに、何と皆様、いつその事、此者に酌取そでは有まいか「乙、よからう〜」みわ「ア、申其酌とやらは」申「チ、何の又其方達が知てよい物か。今爰で教てやる。幸ひ爰に御酒宴の銚子島臺、有合の、聲君様には紅葉の局、梅の局は嫁君役、残りは介添待女郎」と、櫻の局が指圖して、いやがるお三輪に長柄の銚子、持せ持添、「マア、盃は三つ重、嫁右へ二度ついで、左へ二足、コレ立のじや。エ、何じやいの、うかくせずと能う覺や。三度目ついて聲君へ。コレ酒がこほれるわいのふ、不調法な。是からが亂酒論ひ物、是も嗜なければならぬ。サア四海浪なと諷やいの「みわ、エ、」エ、とは嫌か。そんなら聲様拜ます事はマアならぬ。サ夫がいやなら早ふ諷や」とせつき立られ、みわ「是がマア何と、諸千秋萬歳の千箱の玉の」血の涙、聲詰らせてないじやくり、官女「チ、めでたう哀に出来ました。色直しにはんなりと、梅が枝でも蔭組でも、サア〜聞たい所望じやく〜」みわ「エ、あられもない事お

ほてつばら迄云
云一太つ腹迄上
れるほど可笑し
い

つしやりませ。山家育の藪鶯、ほう法華經も片言計、上り下りの仇口や、馬士の歌な
ら聞ても居よふ。もふ何事もお赦しなされ、サ早ふ其聲様に「官女「サア聲様が見たくば、
早ふ諷や。馬士の歌なら面白からふ。次手に振も立て仕や。嫌ならこつちも成ませぬ。
歸りやく」と引出され、みわ「サアくくく、何のいやと申ませふ」官女「サそんなら諷
や」みわ「アイく諷ひまする」と泣くくも、涙にしほる振袖は、鞭よ手綱よ、タマ立
上り、歌「竹にサ、雀はナア品よくとまるナ、とめてサ、とまらぬナ、色の道かいな。ア
アヨ。エ、爰なほてつ腹め、と此様に申まする」と打伏せば、皆々一度に手を打て、官女扱
もきつい嗜事、よい慰で我々が、ほてつ腹迄よれました。馬士殿太義」と云捨て、行
を驚き、みわ「コレ申、わたしも俱に」と取すがれど、ふり放されてはがはと轉け、寐な
がら裾にしがみ付引ずられて聲を上、「のふ皆様お情ない。どふぞ私も御一所に、連て
ござつて下さりませ。お慈悲く」と手を合せ、拜み廻るを擲のけ、官女「チしつこ。沖
も及ばぬ戀争ひ、お姫様と張合ふとは、叶はぬ事じや置ても。大膽女のしつけをせう」
と、耳を引やら脇明より、手を指入てこそぐるやら、抓りつ叩いつ突倒し、「サアく是
で姫様の、悋氣の名代納まつた。彌めでたい御祝言、三國一じや。聲を取濟した。しや

んく、しやんと濟んだ」と打笑ひ、局々へ入跡は、前後正體泣倒れ、暫し消入居たりしが、みわ「エ、胸欲じやわいのく。男は取れ其上に、まだ此様に恥かよされ、何と堪へて居られふぞ。思へばく、難面男、憎いは此家の女めに、見かへられたが口惜い」と、袖も袂も喰裂々々、亂心の亂れ髪、口に喰しめ身を震はせ、「エ、妬しや腹立や。儂おめく、寐さそふか」と、姿心もあらくしくかけ行向ふに以前の使者、「チ、其方も邪魔仕に出たのじやな。もふ斯う成たら誰出ても、構はぬく、そこ退や」と、袖すり抜てかけ入裾、しつかと踏へ「フカ」コリヤ待女「みわ」イヤ待ぬ、爰放しや。放しやく」と身をもかく。鬢擱んで氷の刃、脇腹ぐつと差通せば、うんとものつけに倒れ伏す。刀突捨邊を窺ひ目を配る。奥は豊に音楽の、調子も秋の哀なる。お三輪はむつくと起返り、「扱は姫が云付じやな。エ、慘たらしい。恨はこちから有物を、却てそちから殺さする、心は鬼か蛇かいやい。チ、殺さば殺せ一念の、生かはり死かはり 付纏ふて此恨、晴さいで置こふか。思ひ知れや」と奥の方、睨詰たる眼尻も、叫ぶ聲音もうはがれて、さもいたはしき其有様、じろりと見やり、フカ「女悦べ夫でこそ、天晴高家の北の方。命捨たる故により、汝が思ふ御方の手柄と成、入鹿を亡す術の一つ。チ、出かしたなア」みわ「何と、賤しい此身

を北の方とは「フカ」ホ、ヲ其方が語らひ申せし方は、忝くも中臣の長男淡海公」みわエ
 エ、シテ又私が死るのがいとしいお方の手柄に成て、入鹿を亡す術とは「フカ」ホ、ヲ
 其譯語らんよつく聞。彼が父たる蘇我の蝦夷、齡傾く比迄も、一子なきを愛へ、時の
 博士に占はせ、白き牝鹿の生血を取母に與へし其驗、健成男子出生、鹿の生血胎内
 に入を以て入鹿と號。去によつて、彼奴が心を鏢すには、爪黒の鹿の血汐と、疑著の相
 有女の生血、是を混じて此笛に、注ぎかけて調る時は、實秋鹿の妻戀ごとく、自然と鹿
 の性質顯れ、色音を感じて正體なし、其虚を計て寶劔を、過なく奪返さん、鎌足公の御
 計略。物蔭より窺ひ見るに、疑著の相有汝なれば、不便ながら手にかけてし」と、件の笛の
 六穴に、たばしる血汐受注ぎく、「今こそ揃ふ此幻術。此笛こそは入鹿を擲ぐ火串なら
 ん。ハ、有難や」と押戴き、いさみ立たる其骨柄、けに藤原の御内にて、金輪五郎今
 國と、鍛に鍛し忠臣也。みわ「なふ冥加なや勿躰なや。いか成縁で賤の女が、左様したお
 方と暫しでも、枕かはした身の果報。あなたのお爲に成事なら、死でも嬉しい忝い。と
 はいふ者の今一度、どふぞお顔が拜たい。譬此世は縁薄くと、未來は添て給はれ」と、這
 廻る手に緒環の、「此主様には逢れぬか。どふぞ尋て求馬様。もふ目が見へぬなつかしい。

薄くと—薄くと

追々―負ひにか
荒しこ―雜兵

さすまた―さす
まいにかく

折扇帽子―折を
得るにかく

戀しく」といひ死に、思ひの玉の糸切し、緒環塚と今の世迄、鳴響たる横笛堂の、因縁かくと哀也。今國不便彌増に、せめて葬り得させんと、背にお三輪が亡骸を、追々馳來る荒しこ共も、「曲者やらぬ」と取巻たり。見向もやらす悠々と、几帳の綾絹引ちぎり、死骸と俱に我五躰、くるくしつかと引結び、「死人を取置我等こそ、先出來合の坊主役、十念授てこまそふにも、都度々々には邪魔らしや。一度にかためて授るが、うぬらが爲には百年め。いざ來いやつ」と力士立。アラシコ「ヤア廣言なる骨佛」と、前後双より十文字、鎧先揃へて突出す、ひらり早業、すつかり素鎧、ほぐれる片鎌踏落せば、後を把棒しつかと取、「しりへをねらふは不敵やつ、左様に甘ふはさす」またも、引たくつて打折たり。「手取にせよ」と、咄と寄。當るを幸砂石の如くほり飛され、逆行く奴原余さじと、奥深くこそ三重行先の、御殿々々に銀燭を、挑ぐる戸張綾錦、紅葉の殿の御簾卷上、妹姫の今様を、遊覽せんと入鹿大臣、「ヤア女原、そち達、姫が殿へ參、用意よくば始めよといひ來れよ。早ふく」といらだての、使重る樓に、橘姫は今宵こそ、よき折扇帽子水干の、衣紋もはでの、謠舞の袖、檜垣の影より淡海公、弓矢つがふて忍び寄。目充は入鹿が胸先へ、羽響高く切て放す。苦もなく欄で大音聲、入「ヤア宿直はなきか早參れ」一承

はる」と、彌藤次立蕃、走かよつて打かくる。遂「心得たり」と切結ぶ。姫は寶劔振袖に、
 押隠す間も阿修羅の如く、樓目がけ懸來る入鹿、支隔つる官女共、はらり〜と投落
 し、飛かよつて掻い搦む。遁れぬ所と橘姫、寶劔下へ投捨れば、取得る淡海支る兩
 人、打合々々いどみ行。見るにハア〜、我が身も霧に取れし雛鶴の、詮力涙震ひ聲、
 謠「ヲ、嗚お腹が立ませせふ。其お怒をさせますも、皆自が徒から。赦して給はれ兄上」
 と、歎き詫るをはつたと蹴やり、スハハハハハハハ、鉛刀に等しきなまくら物、ことごとく敷籠置
 しは、劔を餌に天皇始、鎌足親子もおびき寄、皆殺にする此計略、誠の劔を安々と、き
 やつら如きに奪はれんや」橘、エ、スリヤ今の劔は偽りと成」スヲ、我帶せしこそ十握の
 劔「橘扱は」と立寄肩先を、抜手も見せず丁ど切。折から吹出す笛の音に、聞入入鹿は
 醉るがごとく、勇氣碎けてかつばと伏ば、不思議や劔は掌をはなれ、忽化したる龍の
 形、雲にうねり雨をさそふて舞下り、松の梢をさら〜、さつと飛入御溝の水、白
 浪さわぎどう〜と、ゆすりあふるよ懐まじさ。橘姫は手疵も忘れ目成り詰しが、「ヲ、
 夫よ、怪しと思ふ心より、龍共蛇共見ゆれ共、正しき十握の御劔ならずや。譬誠の悪龍
 成共、何か恐れん夫の爲、腮にかより死る共、厭はぬ〜。再びもとの寶劔と、顯はれ

給へ」と心願し、ひらりと飛込む水煙、逆立浪に打立てられ、遙に流れくくる、江戸枯
枝に取付身は浮草、たゞよひながら間近く寄ば、金龍頭をふり返し、紅花の舌をひらひ
らく、ひらめく背鱗を鳴らし、浪間を分れば續てわけ、潜ればくどり沈めば沈み、命
限りと追廻せば、又も虚空に立のほる。此方も岸にかけ上れど、叶はぬ思ひ身をあせり、
足も空なる雲行を、目充にこそは慕ひ行。次第に更る夜嵐に、つれて聞ゆる人馬の音、
貝鐘太鼓亂調に、打立々々鯨波の聲。官軍隨へ鎌足公、薄紫の狩衣に、肌は腹巻著込
を著し、立上太郎御供にて、優々然と入給へば、二人の敵を討とめて立出る淡海公、金
輪五郎詞を揃へ、「我君御賢察の如く、入鹿が有様希代の此笛、併し十握の御劔の義は」
鎌「ホチ氣遣致すな、最早我手に入たるぞよ。其子細は兼てより、徒黨を集むるかたら
い山、絶頂によぢ登れば、黒雲俄に覆ひかより、一つの金龍、我袖に落るやいなや、十
握の御劔と顯はれます。今よりは彼山を龍岳と號くべし」と、仰も高き多武の峰、此大臣
の靈嶺なり。立上太郎すよみ出、「ヤア〜入鹿、汝是迄朝恩厚く蒙りながら、王位を犯
す天罰の、只今歸すると知らざるや。見參やつ」と呼はつたり。眠り臥たる兩眼を、く
わつと見ひらきうなり聲、スヤア事々しや鎌足。我に刃向はんなんととは、鶏卵をもつ

て、岩石にあたらんとするより危き工。目に物見せてくれんづ」と、遙の樓より飛おりたり。立上太郎、金輪五郎、双方より引包で切かくる。ちつ共怯まぬ勇猛力、弓手になき捨、馬手にながぐり、追立々々追廻し、鎌足目がけ飛かよる。騒々神鏡手にさよけ、入鹿が頭に指向給へば、鏡に寫る降魔の相、和光のきらめき眼も眩み、勢ひ絶へてたぢたぢく、透を窺ふ勇氣の兩人、腰の番をしつかと組。ス「シヤ面倒な」と兩手に提げ、打付々々膝に引敷き動かせず。鎌足後につよと寄、神通奇代の燒鎌に、水もたまらず搔き切たる、首は其儘虚空に上り、火焰をくわつと吐かけく、飛鳥の如く翔け廻る、一念の程ぞ恐ろしき。淡海きつと見、口に唱ふる重獸品、忽治る朝敵の、しけきが本を打拂ふ、鏝足の徳劔の徳、實譽有藤原氏、花の紐解橘姫、誠をてらす神鏡は、神のおかけの尊くも、謠思へば伊勢とお三輪が菩提、賤の緒環練言を、くり返したる言の葉を、末に傳へし物語り。

第五

逆徒凶賊直に退き、年盡新に春の空、都を江州志賀に移され、今ぞ長閑けき大内山、主

惠得の姿—惠を
得たる意なるべ
し

上の叡慮安らかに、猶奥深き玉だれや、中央の座には中臣の内大臣鎌足卿、同じく淡海の義士の面々、立上太郎利綱、一子三作諸共に、清涼殿に居竝べば、鎌足の大臣は治國の褒祿沙汰有て、入鹿が妹橘姫、親兄にかへ忠義の貞節、豊代姫と名を改め、淡海が宿の妻と、我君の勅諭なり。又大判事清澄は、暫く敵の臣下となり、四海を治むる智謀の勞、詞にも述がたし。向後武官の司とし、三作を養子となし、志賀之助清次と名乗べし。其外に太宰の後室金輪五郎を始とし、各々大祿給はりて、主上を初め一座の勇み。かゝる所へ金輪五郎、殘黨を搦め取、凱歌を唱へ入來れば、故人となりし清舟雛鳥、兩人が追福に、妹脊の山とかはれ共、かはらぬ志賀の山櫻、供養絶せぬ花の塚、譽れを世々の香に匂ふ、折吉川波春の風、幣帛もて拂ふ國の富、市中屋敷と所せき、月の遠近松の半、二月の夕部暖かに、坂東南海、穀、民は至善平かに、秋に米夏に麥、鱗、造も浮める形、千代の竝松洛陽に、文作青き若みどり、惠得の姿、満願の、神は伊勢又春日に八幡、三の恵みも鎮常、打ばはづさぬ陣太鼓、久しき御代を祝しける。

